
死んだら猫った！

青藍蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んだら猫った！

【Nコード】

N5125V

【作者名】

青藍蒼

【あらすじ】

死ぬ瞬間、「来世は金持ちのペットの猫になる」と、思った思い出が頭をよぎった。死んだら終わりなのに、馬鹿みたいなこと言っただと、唾いながら死んだはずだった……が、目覚めたら異世界で猫だった。しかも、飼い主は麗し令嬢とかっ！ 前半は下心満載有ハーレム要素無。動物虐待ととれるような描写がありますのでご注意下さい。中編予定（第三部まで完結済みです）。

注意書き 必読

この作品は、構成上このような行為を行っております。
不快感を抱いた方はブラウザをお閉めください。

・動物愛護に反する行為。

・流血行為。

・男尊女卑行為。

容認するわけではありませんが、本作品では上記の行為を行っております。
不快感を受けさせてしまう可能性がありますので、認識のもと各個人の責任として閲覧してください。

この注意事項を読まなかった上での感想、指摘等はどうぞ遠慮く

ださい。

なにとぞ、ご協力お願い申し上げます。

登場人物 **ネタバレ注意、挿絵有（前書き）**

徐々に人物、情報等追加していきます。

登場人物

ネタバレ注意、挿絵有

メイ

水縁 みずへり 想良 そら

主人公。高校二年（十七）。死んで猫になった？
人間時代は、自己中心のだがカリスマ性があり、基本的に何でも許されていた。愛されキャラ。

フィオーレ・ブルーム

伯爵令嬢。はふはふDカップな麗し美人。十代中頃に見えるが二十歳。

見た目だけで生きてきた節があり、想良と同じく心があまり成長できていない。現実逃避気味。

名前の由来、イタリア語とオランダ語で花。

エクラ・マインド

巨乳メイド。Gカップな赤毛の美人。二十四歳。

以前は、王宮で仕えていた数少ない女騎士。フィオーレに負い目がある。

名前の由来、フランス語の輝きと英語の心。

> i 2 9 5 8 0 — 3 8 0 6 <

シャルロット

オルクラーナという種類の鳥。ピンクの蛙体にペリカンのくちばしと翼がついている。

名前の由来、ケーキ。種類の由来、ラテン語のペリカニス ライナ + 蛙。

現世サブ

プロクス

火の神。名前の由来、ギリシャ語の炎。

アーグア

水の神。名前の由来、ポルトガル語の水。

ラント

土の神。名前の由来、オランダ語の土。

リュズギヤル

風の神。名前の由来、トルコ語の風。美人なお姉さん。

スキアー

ブルーム家の家事全般をこっそり行う人。年齢不詳。名前の由来、ギリシャ語の影。

フリンデッル・ブルーム

フィオレの異母兄、三十三歳。次期、ブルーム伯爵。年齢より、十は若く見える。

名前の由来、オランダ語の蝶。

クークラ・ブルーム

フリンデッルの娘、七歳。頭ノータリン。名前の由来、ロシア語の人形。

前世サブ

凛^{りん}

弟。反抗期の十歳。

ヒロ

本名：前島^{まえじま}広^{ひろ}人^と。年上の幼馴染。悪友。フリーターな十九歳。

小坂^{こさか}

本名：十^と時^{とき}此^こ方^{なた}。中学からの友人。悪友。現在も同じ高校な十七歳。

母親

本名：水^{みづ}縁^{えん}螢^{ほたる}。手が早くて、我が道をいってる人。

父親

実親ではるが、とある家庭環境から空気のように想良から扱われていた。

00・スローモーション(前書き)

初投稿。重要なのはどこまで、はっちャけるかだと思ってる。

00・スローモーション

スロー再生したように世界がゆっくりと流れていた。
目に見えているものや耳に聞こえる音、何一つとして現実味というものはなかった。

水縁みずへり想良はこんなことが現実にあるのだなと、思うよりも先に弟の体を思いつき突き飛ばす。

有らん限りの力で突き飛ばしたので、弟は望んだとおり反対車線に居た。口の端が思わず上がるが、安堵する間もなく、激しい衝撃が体に襲いかかってきた。

一瞬の激痛と浮遊感、視界の片隅に向日葵色の傘が見えた。

「来世は猫になる。しかも金持ちの猫。ゴロゴロして一生過ごすから」と、友人たちに言ってからまだ一時間も経っていない。
馬鹿なことを言ったものだ。死んだら終わりだ。本当に馬鹿なことを言った。

（誰だって死んだら終わりなのに……）

頬を雨が叩いているはずなのに、音もしなければ感覚もない。
痛いと思わなければおかしいはずなのに、何も感じない。

(十七で死ぬとか……)

小さく唾って、想良は目を閉じた。

01・猫？（前書き）

車から体を出したらいけません。たいへん危険です。モチロン、ヤッタコトナイヨ！

01・猫？

柔らかな弾力と頬を撫でる風にうつらうつらとしながら想良は昔、年上の幼馴染ヒロの車から手を出し「これがDカップの感触！」とやけにはしゃいだことを思い出していた。

ヒロは「がんがん上げて、爆乳を体験させてやんよ」と笑っていた。一緒に乗っていたちっぱい派な中学からの友人である小坂こさかは「スピード落とせー、巨乳なんぞに興味はねー」と手を出しつつも言っていた。

『めっちゃ、懐い』

なんでこんな昔のことを思い出すのだろうかと思いつつ、瞼をこすりながら目を開ける。青々とした空、大きな雲が目の前に続いていた。

（自分で単車に乗るようになってからは、あんなことしたとかか忘れてたな、ほんと懐かしいわ。しかし、俺いつの間に寝たんだろ。あー、ビビった）

懐かしい記憶を思い出す前に見た、嫌な夢を思い出して体をブルリ

と振るわせる。あれは酷く嫌な夢だった。
雨の中弟の凜りんと買物に行き、車が突っ込んでくるといふ夢。自分
が死ぬ夢。

『夢？』

なぜ、空がこんなにも近い。
なぜ、大きな雲以外視界に入らない。

『俺、空飛んでっし！』

そのことに気付いた途端、バランスを崩した。
乗っていたのはビーチボールサイズの水の塊だった。胸の柔らかさ
とか思ったのはあれだったようだ。意識がはつきりしてくるとウオ
ーターベッドの方が近かったなど、思い直すが……。

『以前として落ちてるって言う、ねっ!!』

事故って、落ちて。

きっと俺はまだ夢の中に違いない。

だうん、だうん、だうん。

意外と長い浮遊感の間を考える。

想良は思った。不思議の国のアリスもきつとこんな気分だったに違いない、と。

それはさておき。どうしたものだろう、夢ならそろそろ覚めて欲しい。マジで、今すぐ。

このまま落ちたら確実に死ぬだろう。本家と違って空から落ちてるのだから。

神さま、俺が何をしたというのでしょうか、確かに人を病院送りにしたこともあります、基本的には良い子の良い子でしたよ、酷いです。あんまりです。会う機会があったら、殴ります。

涙を手で擦る。

『さつきから気になっていたが、俺ってこんなに毛深かったっけ？』

白い毛に覆われた手、あんど、ピンクの肉球。

(め、目の錯覚だ。違いない)

全身を見渡す。真っ白な手足、空に向かって蠢く尻尾。

02・猫？2

ついつと、買い物かごと財布が母親によって差し出された。

「なにこれ？」

「ちよつと凜と買い物行つて来てよ」

「ヤダ。今、ヒロと小坂来てんじゃん。凜も十歳なんだし一人でい
いじゃんか」

高二になって弟と出かけるというのも嫌だったが、反抗期真つただ
の凜になるべく関わり合いになりたくなかったというのが本音だっ
た。

母親が買って来た向日葵色の傘を見た途端、想良の愛用するモスグ
リーンの傘をひつつかんで来て「子供っぽいからこれと変えろ」と
食つてかかってきたのに対し、イラつときてつい「お前は子供だつ
つ」と手加減はしつつもボコボコにしまったのは記憶に新し
い。

（大人げなかつたけど、マジ泣きされた拳句、モスグリーンの傘を
奪われて俺のが散々だった。何より、今日は雨が降っているので行
きたくない。向日葵色の傘をさす男子高校生の気持ちを考えてるつて
の！）

手の内の人間は可愛がる派だが、突っかかるくせに甘ったれた性格の凧が想良は気に入らなかつた。否、それ以上にその甘えが許されることが赦せなかつた。

「あんたと違って可愛い凧が誘拐でもされたらどうすんのよ」

「ないない。あんなわがままぷーを誘拐する奴なんていないっての。むしろ、俺のがイケメンだから。青いおめめの水縁くんって有名なすよっ！」

「はいはい。おじいちゃんに似てよかつたですね。ご近所で有名な不良の水縁くん」

「あら、凧つたら、いつから不良になつたのかしらあ？」

「お前だっ！」

拳が飛んでくる。「母さんに似たから手が早いんだよ」って、その時は確かに、ひょいっとかわしたはずなのに痛みが襲ってきた。

『痛い。そして、痛い』

某アニメのキャラ風に痛みを訴えてみる。

(ん？ 俺、どうしたんだっけか？)

「ぐげっ！」

『ぎゃああああああああああつ！ しっ、しっ、寄んな！』

振り返ると鳥……ピンクのカエルにペリカンから嘴と羽根をつけたようなファンシーな生き物がそこにいた。

どうやらこいつがばっくとした正体であり、痛みの原因のようだ。

「ぐげげ、ぐげげっ」

『騒ぐなっつの！ 焼き鳥にすんぞ、コラー！』

鳥っばいそれから距離をとってから、周りをキョロキョロと窺う。ここはどう見ても誰かの家である。中世ヨーロッパ風で、如何にも金持ちって感じの匂いがぶんぶんする。

ふかふかの赤いカーペットに、大きなシャンデリア。装飾品も金ときている。

『……………』

自分の体と部屋を交互に見る。

（俺、たぶん、猫。ここ金持ちの家！）

小さくガッツポーズを作る。

（やばい、マジでかつ！）

生憎と近場に鏡がないので、現在の自分の姿は見る事ができないが猫科であることは見た目的に間違いない。

変な鳥がオプシヨンについているが、猫になって、金持ちのペットとして一生ゴロゴロして過ごすという願いどおりだ。

（ジーザス、神さまありがとう、もう、絶対殴るとか言わない。たぶんだけどっ！）

「シャルロット、騒いでどっした……あらあら、猫さん起きたのね」

悦に浸っていると、部屋の中に甘い香りが漂った。

03・麗し令嬢と巨乳メイド（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。飽きられないようになると、間を開けないように頑張りますので、お付き合いください。

03・麗し令嬢と巨乳メイド

部屋に入るなり、想良は高らかに宣言した。

「来世は猫になる。しかも金持ちの猫。ゴロゴロして一生過ごすから」

無論、部屋でジュースと茶菓子を待ちわびていた二人の友人は何のことかさっぱりわからず一瞬、呆けた。が、すぐに何かあったのだろうと長い付き合いから察した。

想良は思ったことを誰かに言う癖がある。

しかも、理由を聞くまで続けると言う、実に性質の悪い癖が。

今も、「どんな人間でもいいんだ、俺と言う猫をでっぷりと太くらい可愛がってくれれば」と続けている。ちらりとヒロのことを小坂は見たが、いつも通り流すことを決めたらしく菓子の皿に手を掛けてている。

こう言う時程、ヒロは年上甲斐がないと小坂は思っていた。めんどくさいことは嫌いな性格なので、すっぱりと流してしまうのだ。

「その心は？」

小坂はやれやれと思いつつ、ため息交じりに聞く。

「この間見た、芸能人のペットの猫がでっぷり太ってて幸せそうだったのと、これから凜と買い物に行かないといけないのが嫌だから」

「ああ、そう。ガンバってね、オウエンシテル」

無理やり終わらせ、一人で食べる気のヒロから皿を取り上げて机の上に乗せる。

「なんて、友達がいないっ！　ここは俺の代わりにいますぐ買い物に行くよって言って欲しかったのにな！」

「「却下で」「

揃った声に「覚えてるよ」と、想良は小悪党の様な台詞を吐き部屋から出ていく。二人は笑いながら「いつてらっしやい」とまたも声を揃えた。

(妖精……)

映画や本で見る様な妖精を思わせる少女がそこに居た。

緩やかな曲線がかかる金髪は、床に届きそうなほど長いが煩わしさは感じられない。むしろ、着ている白いドレスと相まって彼女が動く度に金色の粒子をまき散らすようだ。

「ぐげげ、ぐげっ！」

シャルロットなんて似合わない名前の鳥っぽい生き物が嬉しそうに少女に近づいていくがそれは無視して、ジッと想良は更に少女だけを見つめる。

透き通るような白い肌についた大きな碧みどりの目も、ほんのり紅色を帯びている唇と頬も、否。どれをとっても今まで自分が見てきた人間の造形の中で美しいと感じずにはいられなかった。

(やばい、やばい、やばいっ……！)

小柄な姿からして、年の頃は自分とあまり変わらないか少し下ぐらいだろう。

「シャルロット、この部屋には入ってもいいけど騒いでは駄目だと言ったでしょう？ 悪い子ね、メっ」

鳥っぽいものは「ぐげえ」とややしょんぼりとするが、そんなことどうでもいい。

（仕草が可愛い、「メっ」とか！ え、この人俺の飼育主的な？
めっちゃ好み、超好み！！）

なにより、甘い匂いが堪らない。

甘い匂いは女の子がするような甘ったるい香水に似ていたがもっと自然な匂いで、花のような、お菓子のようななんとも言えないまるで想良を酔わせるための香りのようだった。

『ぜひ、あなたのお名前を聞かせてくださいっ！！』

堪らず、想良は盛大に声を上げた。

自分の体が現在猫のようなものだとということを忘れて。

「まあ、可愛い声！ シャルロット聞いた？ にゃあって、猫ってこんな風に鳴くのね！」

「ぐげえ」

目を少女は輝かせる。キラキラと眩いぐらいだ。

(……ん？ 今、なんて言った？ にゃあ？ にゃあって何？ 誰が言ったの？)

「なんて、可愛いのかしら。猫さん、もう一度、ねっ、にゃあって鳴いて」

白いほわほわした自分の体をぎゅっと抱きしられ、高ぶる何かを感じたが心の中はいろんな意味で溺れ死にそうだった。

『ウソ、俺もしかして、にゃあって言ってんの？』

一気に、気が遠くなった。

03・麗し令嬢と巨乳メイド（後書き）

次話には巨乳メイドが出てくるはず。乞うご期待？

04・麗し令嬢と巨乳メイド2

「へいへい、彼女ー、お茶でもどうよあ？」が、「にゃあ」ってねえ、神さま、あんた一体、俺にどうやって彼女を口説けと？くう、涙が出てきそうだ」

自分の耳に聞こえる言葉と、他人が聞こえる言葉が違っただなんて誰が思いつくだろう。想良は体は猫であることはなんとなく自覚していたが、言葉の違和感はまったく感じていなかったのだ。

（いやいやいや）

フルフルと頭を振って気を持ち直す。

（ここは良い方に考えよう！ シャルロ……あんなファンシーな動物もいるのだから、人間になれる猫も居るかもしれないじゃないか！）

こんなファンタジーチックな世界なのに、自ら夢を捨ててどうする。むしろ、いきりたてると、自分を叱咤する。

「そう、いい子ね。怖くないのよ」

想良の葛藤など知らない少女は、純真な笑顔のまま抱きしめる力を少し強めてきた。その所為で、また花の香りが鼻孔をくすぐる。

(いや、猫が下心を持つのがいけないんだ。飼い主が美人だったからって、所詮は猫と人間。下心は捨てられないとしても、恋心は捨てよう、俺は猫。俺は猫……てか、猫なら顔をうずめても仕方ないさっ！！)

無駄な葛藤をやめて、わざとらしく「にゃーん」と鳴きながら少女の胸元に顔をすり寄せる。

「これは、も、もしや……はふはふDカップ!?!」

首元まである白いドレスのせいか、あるいは少女が着やせするタイプの人間なのかは判断しかねるところだが、顔の近くの柔らかさは風やあの水の玉より遥かに心地よい。

(もういい、猫でいい。むしろ、今最高)

調子に乗って、ぐりぐりと顔をくっつける。

「ふふふ、くすぐったいわ」

『猫万歳、俺万歳ー!』

ばくっ。

『ふぎやあああああつ、また、これがよっ！！』

再びの感覚と、失われた視覚にもがく。ようやくシャルロットの口から逃れた俺の前には、メイド服姿をした赤毛の美人さんが居た。オプションにはシャルロットを抱えて。

「ぐうげげ」

大きな口をバクバクつとシャルロットは動かしている。

(このメイドが俺のことシャルロットに食わせた?)

切れ長の青い目のせいが一見綺麗だがどこかつんけんして見えるが、鼻の頭にある薄らしたそばかすが顔立ちを和らげている。ものの、想良を見る目は果てしなく冷たい。まるで嫌悪し、蔑むようだ。

29

「エクラ、猫さんに何をするのっ！」

「いえ、フィオーレ様に対し不埒なふるまいをしているように感じましたので」

(す、するどい)

蔑んだ目で想良をエクラと呼ばれた女は見ている。

(下心はほどほどにしよう、うん。少女の名前もわかったし、うん、落ち着こう、俺)

「じゃーん」

うるうるを目をさせながら、エクラを逆に見返す。

（大体、女性は動物好きなものだ！ 大丈夫！）

愛想をふりまけばエクラも可愛いと感じるだろうと想良は自分自身が持つ愛想を身から絞り出すようにしていたが、すればするほどその目は濁っていく。

「……やはり、神殿に引き渡した方がいいのでは？ 神聖というよりもしれからは邪心によいようなものを感じます」

「そんなことないわよ、すっごく可愛いわ。それに、私にもとても懐いてて」

「そう、ですか？」

ギロリ、もし、視線だけ人が殺せるなら想良は彼女に確実に殺されていただろう。

ため息交じりに、想良はフィオレの腕の中からひよいつと飛び出す。目標はペットだ。ここで、追い出されるわけにはいかない。

「もうっ！ エクラが睨むから猫さんが怯えてしまったわ」

「怯えていますか、それ？」

ジッと睨んでくる目から逃れるように、しれつとフィオレのドレスの裾に隠れる。小刻みに震えて、「おびえていますよー」っという

のをアピールするの忘れない。

「仲良くしてあげて、ね、エクラ」

「……善処します」

嫌そうな声に肩をすくめる。

この人と仲良くなるのが、どうやら今のところの一番の課題のようだ。

（仲良くできるかなあ、めんどくさー）

04・麗し令嬢と巨乳メイド2（後書き）

今回は、エクラ視点で、世界観等を書きたいと思います。

05・麗し令嬢と巨乳メイド3 (side:エクラ) (前書き)

お気に入り登録またまた、ありがとうございます！観覧数もこんなところになります！

05・麗し令嬢と巨乳メイド3 (side:エクラ)

エクラ・マインドは敬愛すべき主人であるフィオレ・ブルームの胸の中でゴロゴロと喉を鳴らす猫を見て、第一印象が正しかったと再認識した。

「にゃあん、にゃあーん！（猫万歳、俺万歳ー！）」

認識し、地面でそわそわしていたシャルロットを抱えその後頭部に顔を寄せさせる。

ぱくっ。自分の意を酌む生き物の夕飯を少しばかり良いものにしよ
うと心に誓った。

初見、エクラはフィオーレの愛鳥であるシャルロットがでろつと口から出したそれを見るなり眉を顰めた。

シャルロットが何かを拾ってこることは珍しくなかったが、生き物は初めてのことだったし、何より涎にまみれでぐたつとしている白い塊は絵でしか見たことはないあの生き物 「猫」だったからだ。

「不吉だ」

猫と言えば、この世界を支える四神の仮の姿。もしくは、神の使いフェーレスとして扱われている神聖な生き物である。

本来ならばエクラが口にした不吉とは無縁の存在なのだが、殊に彼女は四神の迷信家だった。

四神とは、この世界を作った神々のことだ。

火の神、プロクス。

水の神、アーグア。

土の神、ラント。

風の神、リュズギアル。

彼らは神でありながら、人とともに有る神である。

本来神と言つのは目に見ることもできず、触れることも叶わぬ想像であるべきだが、この世界の神々は目に見え、存在を現に置いている。

現の姿こそが、猫であった。

今でこそ猫は滅多に出会うことのできない神聖な生き物になってしまったが、遙か昔は数多く存在し、人の生活にも親しんだ生き物であったと言う。それ故に、その姿を選んだのだと。

もちろん、神々が現で人の姿を取らぬわけではない。格式ばった式典や像などでは神々の人の姿を見ることができ。

神々が猫と呼ばれる生き物の姿を平素のものにしているのは人の形をし、偉業をなすということにより人との格差を生むのを避けたかっただけにすぎない。

だが、これが間違いだった。

人は驕ってしまった。

水の神であるアークアは四神の中でも温厚で人との交わりを大切に
する神であった。

彼の人は、水の中に住まう魚や水辺に生きるものたち、花を愛でる慈愛の神であった。

時に、他の神が人の業により荒ぶるのならば双方を静めてくれる良い神であった。

一人の人間が、彼の人の居ぬ間に大切にしていた花を手折ったのが神々と人との交わりに大きな亀裂を生んだ。

花を手折られたアーグアは怒り狂い、世界を水に沈めようとしたのだ。

守ることのできなかった獣たちを罰しその姿を混ぜ、醜いものへと変貌させた。

他の神々の言葉など彼の人は聞かず、その領土を水で侵していった。数多の命を奪っていった、猫も、人も。

アーグアが世界を壊すのをやめたのは、七割近くを水に沈めた後だった。

彼の人の怒りを止めたのは、枯れかけた一本の花だった。

人に奪われた花を見つけ、彼の人は壊すのをやめたのだ。

その花が如何に大切だったのか、他の神々にも人にも察することのできた瞬間だった。

花を見つけた神は、人も獣も、神さえも寄りつかぬ深淵の底へと眠りについた。

残された神と人は己の領分を弁えることとなった。

人は神を近しいとは思わせない。

神は人を近しいとは思わない。

それが、世の理となった。

猫は神の仮の姿。もしくは、使い。

今や、見つければ神殿に申請してからでないとして所有権が与えられな

いそれが、その猫が目の前に居る。

神々でない一般的な猫には模様があるとされているが、目の前の猫にはそれらしいものは見当たらない。

けれど、神々は瞳と同じ色の毛並みを有すると言っ。

(白い毛並み、眼が白色ならば……もしかしたら、あのアーグアかもしれない)

全てを無に帰そうとした水の神アグーア。それがこの猫かもしれないとエクラは思っていた。

ただし、その仮説が正しかった場合、不吉などと簡単に言葉に表すことはできないが。

ごくりと、息を飲んで、猫の臉を持ち上げる。

先にあつたのは、深い青だった。

「ただの猫か。……しかし、汚いな、これ」

洗うのが先か、主人に報告するのが先かエクラは悩んだが、家の中に入れるならば報告するのが先だろうとなるべく触れないようにしてフィオレの元に向かった。

06・麗し令嬢と巨乳メイド4

想良は腕を組んで、額に皺を寄せていた（猫の毛に覆われているので傍から見れば多少目つきが悪いぐらいにか見えないのだが、本人にとってはこれでも最大級の不機嫌の現れた顔のつもりである）。

『いやー、メイドさん、これはないわあ。首ひつつかんで移動つてないわあ』

エクラは極力触りたくないらしく、首もとの皮を右手で掴んでいる。こうされてから、たったの一分程度なのだが、ぶらぶらと頼りなく動く足と尻尾が想良にはなんだか切なくて堪らなかった。

『そのふくよかな胸はなんのためだよ、抱っこして運ぶべきだろうがっ！』

「……、うるさい」

騒いでも取り合ってくれないエクラの胸を想良は、怨みがましく見た。

遠目にも大きさがあるのがわかるそれは、フィオレのものより遙かに大きい。

（ヒロのエロ本を見た感じだとF……いや、Gは堅い！！くっそう、男心を無碍にすると後が怖いんだからなっ！）

幾ら試そうとも、手は後ろに関節を曲げるところか、前の方で小さ

く小刻みに猫の手は動くだけだ。

「そんな抱き方しているせいじゃないの？ やっぱり、私が運ぶわ」
前を歩くフィオ レの顔は心配気だ。

『ぜひー、ぜひー』

訴えるように鳴くと白い手が伸びてきたが、触れる前にひよいと
想良の体は手の届かぬ所へ。

「いいえ、フィオ レ様。これはまだ、タオルで拭いただけで汚い
です。」

「確かにシャルロットが運んで来たけれど、もう毛も乾いてるし汚
くないわよ」

そう、このエクラが想良を抱えている理由は風呂に入れるためだっ
た。

想良には彼女たちが言っていることがあまり理解できなかったが何
かに申請するために、一端綺麗にしてからどこかへ行かなくては
いけないらしい。

（たぶん、役所とかなんだろうけどさ。別に俺本体が行かなくても
いいじゃんよ。めんどいー）

「口の中など黴菌だらけです。この猫がおかしな病気を持っていた
らどうするのですか」

淡々とした口調に想良はべっと舌を出す。

(だったとしたら、既にあの鳥っぽい生物は病気だったの！)

余談ではあるが、当然のごとくシャルロットはこの騒動に付いてこようとした。だったが、「邪魔なので」と、エクラによって先ほどの部屋に閉じ込められてしまっている。かすかに想良の耳には「ぐげええっ」と叫びが聞こえているが近寄りたくないので、聞こえていないことになっている。

やって参りました。お風呂の時間です。

右手に想良を持ったままエクラは金タライを準備した。……張られたのは冷たそうな水である。

『いやー、いやあああつ！ 水なんかで洗われたら風邪ひくう！！』
必死に暴れる。

この水の温度が何度かは知らないが、常温水より冷たいのは金タラ

イについた水滴から余裕で推測できた。

あれは、明らかに水を汲んだ時のものではなく、その後のものだ。

「コラ、暴れるな、この馬鹿猫っ！」

『暴れるわっ！ ふざけんな、俺が紳士だとしてもお前の体に傷つけるのなんて躊躇わないからなっ！』

フィオ しならいざ知らず、何度も叩くこんな女に対し、気を使うつもりなど想良には全くなかった。

今、爪があるのは何のためかと聞かれれば即答するだろう。「この胸デカ女に喧嘩を売るため」だと。

「エ、エクラ、もうちょっと優しくしたらいいんじゃないかしら？

猫は水を嫌がる生き物だって聞いたことあるしきつと嫌なのよ…

…」

フィオ レはオロオロと後ろから声を掛ける。その顔は心なしかさつきよりも青い。

「一気に洗った方がこいつのためです！」

『ちがーう、冷たい水が嫌なんだっつもの！ あと、お前に洗われたくないのー！』

この後、暫くの攻防戦が続いたが所詮、猫と人。

体力が先に切れたのは想良の方だった。

『へつきし、あー、ざぶい』

フィオ レが優しく拭いてくれるのだけが救いである。

「…………、つ馬鹿猫が…………」

エクラも同じくタオルを頭からかぶっている。

洗われている間も、終わった後もしつかりと想良は彼女に水を掛けた。洗い終わった今となつては、生地が厚いのかメイド服は色が変わっているだけで透けていないのが残念なくらいだった。

（あー、もっと、盛大にやればよかった。相手が牛乳なのは非常に残念だけど、さすが美女。濡れて色気が増した気がするわ）

「エクラ、ここは良いから着替えて来るといいわ。貴女相当濡れているし、風邪ひいてしまうわ」

「いいえ、それとフィオ レ様を二人つきりになどできませんので」

『紳士だっつの、俺は』

男は皆、狼と言う名の獣ではあるが、フィオ レを傷つける気など想良にはまったくなかった。襲うなどもつての外である。

(大体、俺今猫だし)

人間だった場合、即座に口説いていたであろうことは否定しないが。

「そう言えば、フィオ レ様、神殿に行く前にその馬鹿猫に名前を付けなくてもよろしいので？」

申請の時のために今決めておいた方が良いのでしょうか？」

「そうだったわね、あ、そうだ、エクラ！ この子に名前を付けてくれないかしら？」

「ぼけなすびで」

プイ。顔を背ける。そんな名前は断じて認めん。

「もっと、他に……」

「だったら、シロで」

プイ。絶対ヤダ。

「嫌みたいね。他には？」

「……フィオ レ様が決めた方が早いかと存じます」

(俺の名前は想良以外ないし)

くわっと、口を開けてあくびをする。こればかりは、フィオ レの名付けでも頷く気は想良になかった。

「何がいかしら、男の子だし可愛らしいのは駄目よね」

(悩んでる姿、可愛いー。ま、それはそれ、これはこれ)

出される名前に想良は全て知らん顔した。

「うーん、これも駄目なの？ 他に何がいかしら」

「いいじゃないですか、もう、ぼけなすびで」

「それはちょっと……」

(毛も乾いたし、なんか眠くなってきた)

フィオレの膝の上で丸くなる。気温が高いのか、エクラの服もやりとりしている間に結構乾いてしまったようだ。

「フィオレ様、いつそ空そらでいいんじゃないですか？ 目青いし、シャルロットが空から連れて来たことですし」

「ソラ？」

『あー、それ、それ待ってた。あんたが名付けてるのは気に入らんけどね』

フィオレは顔を綻ばせる。

「猫さん、ソラって名前が気に入ったのね」

猫は一声鳴いた。

07・異世界の街並み（前書き）

登録、観覧、感想ありがとうございます。これ、意外と読まれてるんだなあって思いました。

07・異世界の街並み

ごっとな、ごっとな。

揺れる馬車。揺れる尻尾。

(なんか、ドナドナな気分)

おんぼろな荷馬車ではなく普通よりも少し豪華な馬車で移動しているのだが、生憎こう言う乗り物で移動したことのない想良の頭の中に流れるBGMは有名なあの歌だった。

当初はピクニックに持って行きそうな藁のかごに入れられてから馬車に乗せられたのだが、乗るなり想良はそこから出た。

(狭いし、暗いし、少し臭かった。絶対普段は、食べ物を入れるために使ってるに違いない、間違いない！)

それから、窓枠に前足を乗せて外を見ていた(ちゃっかりフィオレの横を陣取ったのは言うまでもない)。

フィオレはクスクス笑っていたし、エクラに頭をひつつかまれたりもしたけれどずっと見ていた。

（ビバ、ヨーロッパ風。……にしても、ここやっぱアニメとかゲームみたいな異世界っぽいなあ）

最初は、緑ばかりでやや退屈していたもののエクラへの反抗の意思もあり踏ん張って見ていた。

楽しくなったのは街が見えてきた頃だった。

赤レンガの建物、見たことのない形の街灯。カラフルな配色の服。物や人を見る度にわくわくせずには居られなかった。

尻尾も気持ちと連動しているようで、ぶんぶんと音をたてそうなほど左右に揺れている。

『しかし、ヘンテコな生物が多いんでない？』

始めは見間違いかと思ったが、目に入って来るのはシャルロットのようにいくつもの種類の生物を掛け合わせたようなものばかりだった。

例えば道を歩いている犬もどき。主体は犬なのだが、がっしりとした足は犬というよりもライオンのそれに近い。

（俺みたいな猫もないしー、変なの）

市場に売っている魚のどぎついカラフルは熱帯魚として許せたとしても、虫の翅や足みたいなものがくっ付いてたりしていた。「うへー」と言ってしまったのも、食欲がまったく湧かないのも日本の素朴な魚を見慣れているせいだろうが、想良が首をかしげる理由は

他にもあった。

人間は至って普通なのだ。

見慣れたアジア風の顔立ちも居れば、西洋風の顔立ちも居る。髪だって、どぎついピンクをした人なんて居ない。黒や茶色、金髪。派手なのなんてエクラのような赤毛ぐらいだ。

「フィオ レ様、そろそろ神殿です。馬鹿ね……ソラを駕籠に入れましょう」

「そうね、ソラさん。駕籠に入ってくれるかしら？」

『んー、あいよー』

反対側に置かれているかごに向かう。

尻尾が2回ほど、エクラにぶつかったが「事故」である。

07・異世界の街並み（後書き）

次回は神殿。今回短かったのは、ストック作りなんかじゃないですヨ……切りをヨクシタカタ、だけ。

08・神殿、神官、美人が居ない！

(どの人もやたらと立派な服を着てるけど、役人には見えない……)

シンデンという場所は、想良にとって神殿と繋がっていなかった。入る前に見た建物がちよつと大きな教会にしか見えなかったというのも手伝って、ただ単にそういう発音をする名前の場所なのだと思うっていたのだ。

「神官様、この度は猫を見つけましたので申請に参りました」

フィオレが受け付けをしていた若い男にそう言うまでは。

(シンカン⇨神官？ シンデン⇨神殿？)

『「」』、神殿っ！?』

暫くして通されたただっ広い場所には、白い髭を蓄えた人の良さそうなのこの老人が居た。

(偉い爺さんなんだろうけど……サンタクロースの偽物にしか見えないぞ、この人)

赤い服じゃないのが残念なその老人は、片眼鏡モノクルをくいつと押し上げながらかこの中の想良を観察する。

「ほほう、なんとも珍しいですねあ、白い毛に青い目の猫とは」

首の皮をエクラと同じくひつつかんでかごから引きずり出した老人は、サンタクロースよろしく「ほうほうほう」っと笑う。

（つうかあ、この世界の猫の掴み方ってコレ、コレがデフォなのっ！？）

想良の心の中は複雑だった。

仮にこれがデフォルトの場合、フィオレにも首の皮を掴まれる可能性がある。

（抱っこ以外、無理！ いや、爺さんは男だからやられたくないからいいんだけど、女性には抱っこしてほしい！）

クッキーとミルクを用意して、お願いの手紙を書いたらこの老人が願いを叶えてくれないだろうかと考えてやめる。

そんな準備はできないし、できたとしてただの老人どころかサンタクロースだって「女の人は猫を胸抱っこ」などという抽象的な願いを叶えられるわけもない。

「模様は見当たらんようですが……どのようにして保護されたのかな？」

「当家で飼っていますオルクラーナが、口に銜えてきましたので詳細はわかりかねます」

事務的にエクラが説明していく。

（オルク？ オラクーナ？ よくわからんけど、シャルロットの鳥の種類かなんかか？）

「あの、どなたかの飼い猫ではないわよね？ できれば飼いたいのだけれど」

「このように珍しいのは登録されておりませんし、大丈夫でしょう」

「よかったわ」

老人は余った左手で髭を摩りながら、思案する。

「しかし、本当に珍しいですな。白い毛とは……」

「ええ、そうですね。ところで、申請の書類はどちらで書けばよろしいのかしら？」

「若いものに案内させましょう、ここでお待ちになると良い。ああ、そうだ、言い忘れとったが、猫は申請用に肖像を描かねばならんで少し借りることになりますが、良いですかの？」

（肖像画あっ！）

不安げにフィオ レを見つめる。

（絵を描くだけだよな？ 石膏で型とられたりしないよな？）

「その肖像とは、一体どのくらいかかるものなのでしょうか？」

「この猫は模様もないし、三十分もしたら正面の入口の受け付けで受け取れるでしょう」

「そうですか。頑張ってね、ソラさん」

優しい言葉も今は何の慰めにもならない。

『えーえー』

「精々、大人しくして早めに終わらせることだ。フィオ レ様を煩わせるなよ」

優しくない言葉はもっと慰めにならない。

『えーえー』

老人に首根っこを掴まれたまま、想良はその場を後にした。

結果から言つと、書類よりも想良の肖像画のほうがかなり早く終わった。

絵を描いたのが油ギツシユな中年の男だったので、固まって動けなくなつた想良の絵には三十分もかからなかつたのだ。

『地獄、地獄。メイドさん超素敵だわ。あれは、ない。マジでない』
思い返しただけでも背筋がゾツとする。

(あー、早く来ないかな。今すぐ目の保養がしたいよう。この際、見知らぬ美人さんでもいい、どこか居ないかなあ)

一番最初に会つた若い神官が受け付け台の横の机の上に準備してくれたふわふわなクッションの上から、周りを窺う。
動かないように言われてはいるが、猫が人間の言うことをわかるなんて思うはずないし、多少は動いても平気だろう。

何より、少し離れた所に居る若い神官はやって来た人を捌くので忙しそうだ。

『ふふーん、びじーん、びじんさーん。どっかに居ないかなー』

鼻歌交じりに受け付け台から顔を覗かせる。

二人以上とは言わない。ただ、お年頃のお姉さんが見つければ想良的には大満足だった。

(ぶう、男ばつかあ。巫女さんは居ないのかよ)

ごろん、とだらしく大の字に想良は寝転がる。

一度、綺麗な人が遠目に見えたが、男だった。

男なんて見てもちつとも面白くなかったし、女の人かと期待した分の失望も大きかった。

いっそ、このままだったら眠ってフィオ　レたちが来るのを待っていた方がマシである。

『あとのくらいで終わんのかな、美人さん居ないし、俺つまんな
ーい』

ちらりと若い神官を窺う。相変わらず忙しそうだ。

荷物の受け取りを抜いても、想良たちのように何かの用事で来る人だけとは考えられないほど人が多い。

(神殿になんでこんなに人が来るんだろう？ あれかな、教会の懺悔的なのでもしてんのかな？ 割に、女の人が居ないけど……)

『男祭りですかねえ』

面白そうな催し物なら見てみたいという気持ちがあったが、今は女に人に会いたい気持ちの方が勝っていた。

書類がほとんど書き終わった時だった。

「今、なんとおっしやいましたの？」

フィオレは戸惑いを隠すこともできずに、目を瞬かせながら若い神官に問うた。

神官長のお墨付きも貰い、書類の申請は滞りなく進んでいた。

あとは、書き終わった書類を提出し、不備の修正等があるだけのはずだった。

「は、はい、ですから、……申請ができないのです」

言葉の意味が理解できなかった。

理想は確かに珍しい白色一色の猫だが、登録をされていないと言われたのだ。ならば、発見者が所有権を求めることは可能なわけで拒否される理由がない。

「やはり、どなたかの猫でしたの？」

「いいえ、その……違つのですが……」

若い神官は視線を様々なところへ動かしながら、しどろもどろに言

葉を紡いでいく。

「ならば、一体理由は何なのですか？ そのように時間を無駄にとられると、こちらとしても対応を考えさせていただきますよ」

エクラの強い口調に若い神官は俯く。

「わ、たしもよくわからないのです。上から……書類を受け取るなとそれだけ言われまして……」

気が相当弱いのだろう、もごもごと尻つぼみになっていく。

「それは神官長様がおっしゃったのでしょうか？」

「い、いいえ。……他の神官の方が……の方から言われたと」

「誰ですって？ 聞こえませんでしたか？」

「ヒッ」と、エクラが口を開くと若い神官は小さな悲鳴を上げる。

「で、ですから……」

周りをきよるきよると窺った後、さっきより少しばかり大きな声で若い神官は言った。

「リュズギヤル様付きのからと……」

フィオ レとエクラは顔を見合わせる。

リュズギヤルと言えば風の神である。ここは、四神を祀る神殿では

あるが特別どの神を贖するわけでもなく、どちらからと言えば神が
らみの事務的な処理を行ってくれるための場所だ。

更に言うなら、神の傍付きといったものの名前が出てくることなど
あつてはならなかった。

09・神殿、神官、美人が居ない！2 (side:フィオレ) (後書き)

じ、時間の関係上短くなっております。すみません。

10・神殿、神官、美人が居ない！3（前書き）

フィオ レさん視点の続きは都合上、次回。

10・神殿、神官、美人が居ない！3

やたらとニコニコしたフィオレと反対にもものすごく不機嫌なエクラがやって来たのは、想良がぐうたれてから一時間以上経つてのとだった。

完全に夢心地だった想良はいつものように首根っこを掴まれて起こされた。

「起きなさい、馬鹿猫」

『おー、メイドさんだ。おはっす。いやーびじん、むねでか、がんばくー』

肉球をすり合わせて拝む、なむなむ。

(目の保養ってすばらしいー)

寝ぼけている想良をエクラは問答無用で手元のかごの中に突っ込む。

「フィオレ様、待たせている馬車を呼んで参りますので暫しお待ちください」

「はい」

待ち望んでいた柔らかな声が聞こえたが、想良は耳をピクピクとさせただけだった。

じゅとん、じゅとん。

暗すぎる視界に目を覚ました想良はとりあえず立ちあがるうとして、頭を打った。

『いてっ』

手で上の方を押す。

(あれ、いつの間にか俺かごの中?)

数回押し上げるが、かごの蓋は鍵が掛けられているのか開かない。

『おーい、出してー。メイドさーん、フィオ レさーん』

少しがさごそしていると、フィオ レが顔を覗かせた。

「起きたのね、ソラさん」

白い手が体を優しく包む。甘い香りは相変わらずで鼻孔が無意識にひくついた。

『えー、何何？ 近くね？ フィオ レさんってば、俺にそんなに会いたかったの？』

胸に抱かれるような体型を良いことに顔をフィオ レの頬にすり寄せる。

「フィオ レ様、それ近くありませんか？」

「そんなことないわよ、エクラもしてみたら？ 毛がふわふわして気持ちいいわよ？」

ちらつと、エクラを見る。

理解できないと言わんばかりの顔だ。許可さえあれば想良を馬車から投げ捨てそうだ。

『あれほど美人に会いたかったのに、実際に会ってみるとちっとも嬉しくなくて俺ってばめっちゃ不思議！』

べーっと舌を出してフィオ レに引っ付く。

『でも、フィオ レさんに会えたのは幸せ！』

膝の上で丸くなる。

白いドレスは触り心地がいいもの的小手に動くと傷つけてしまいうだ。相当良い品なのだろう。

(欲を言つなら、もう少し胸ぐりの開いたドレスが好み)

きゅちりと首元まで覆われたドレスは顔と手先以外見えない。

エクラの方は首が見えているものの彼女も胸は開いていないので、この世界では胸元の大きくえぐれた服は好まれないのかもしれない。それか、そういった服は貴族階級では着ないのか。

(なんか、もったいねーの。せめて、脳内補充を……)

脳内で、フィオ レとエクラに似合いそうな服を考えようとしたところでお腹がぐうっと鳴った。

『腹減った……そういや、何にも口にしていな』

市場で見た魚が頭の中に飛び込んできて、ゲツと舌を出す。

(あれは食べたくない)

「ふふふ、ソラさん。家に帰ったらすぐご飯にしてあげますからね」

『希望は味付けの濃い美味しい料理でー』

もちろん、フィオ レが作ったなら残飯でも愛の力で食べるつもりだけれど。

(でも、メイドさんが作ったものは旨くない限り小姑のようにケチつけてやるうっつと)

にんまりと笑んでから、エクラに対し鳴く。

『夕飯楽しみにしてるんで、よろしくう』

不穏な気持ちは伝わったのかまた、想良は殴られた。

11・神殿、神官、美人が居ない！4 (side:フィオレ) (前書き)

PV10・000アクセスありがとうございます。

今後ともよろしく願います。

11・神殿、神官、美人が居ない！4（side：フィオレ）

馬車に乗ってからフィオレはずっと窓の外を眺めている。

ただし、行きの想良とは違いその眼差しは静かだ。

流れる景色を見つめながら彼女はつい先ほどのことを思い出していた。

風の神、リュズギヤル。

季節の巡りを知らせる神であり、火の神プロクスに続き恐れられている神である。

噴火、地震、台風。

これらの自然現象は火、土、風の三神の怒りとされている。

中でもプロクスは気難しく、被害はあまりないものの小さな火山が噴火することはままあることだ。

続く気難しい神がリュズギヤルだった。

こちらのほうは、数こそ少ないものの被害が大きく、人側からすると触らぬ神に祟りなしとはまさしく、彼の人のためにあるような言葉だった。

「リュズギヤル様付きの方ですか？」

神の傍付きはまさしく、神の傍につかる者たちのことだ。一部は神に籍置く為、「代弁師」または「御使い」とも呼ばれている。

「はい。たまたま来られていて……」

「目にされたのですね」

フィオレは頭が痛む思いだった。

珍しい猫だからリュズギヤル様付きの人は望んだのかもしれないが、こちらにとっては死活問題だ。奪われては困る。

想良を見た瞬間、彼女は歓喜した。五年目にしてやっと希望を手に入れたのだ。

貴族はあまり猫を飼うことがない。

出会っても、神殿に引き取ってもらう人が多いのが実情だ。

なぜ、飼わないのか。

理由は神聖な生き物であるからではなく、貴族にとって不利益にしなければならないからだ。

貴族が猫を飼う場合、一般所有者との差をなくすために自分の籍を返還する必要がある。

つまり、フィオ レなら「伯爵令嬢」という名目がなくなるのだ。家族の爵位はそのままだし、財産を奪われるわけでもない、ただ、籍を返還するだけだが、貴族特有の恩赦は一切なくなる。

まさしく、それこそがフィオ レの望みだった。彼女は貴族としての籍を捨てたかった。

(エクラを騙した罰かしら)

自嘲気味に笑う。

この話はあまり一般に浸透していない話だった。

貴族は猫を神殿に持っていくという構図はできていても、なぜ飼わないのかなど人々は一々考える必要も気もないのだ。知る必要のないことでも言うように。

(けれど、一体、どうしたら……あの人に頼る？ いいえ、駄目、それだけは絶対に駄目。知らないはずがないもの)

本末転倒な思いつきに更に頭を悩ませる。

「フィオ レ様、もう夕刻ですし一端屋敷に帰りましょう。猫の件は後日……」

「おお、ここに居られたかブルーム嬢」

独特な笑い声にフィオ レは心からホッと笑む。

「手続きの進み具合はいかがかのお。猫は既に受付に居ることですぞ」

「いえ、それが……」

悲しげに眼を伏せるフィオ レは、泣いているのではないかと思うほど儚げだった。

「し、神官長様……あの……」

その様子に、若い神官が思わず声を上げる。

「リュ、リュズギヤル様付きの方に書類を受け取るなど言われまして……、今、その説明をしていました」

「あの方が……あの方は気にせんで良いです。通例どおり書類を受け取って申請なさい」

神官長は髭をいつものように擦っている。

「よろしいのですか？」

フィオ レがパツと顔を輝かせる。

「これも縁のなせる業なのでしょう」

髭を弄るのをやめ、神官長は胸の前で手を合わせる。

「パラ ウマ フロル」

聞きなれない言葉だったが、自分に向けられた言葉にフィオ レは頭を下げる。

「籍の返還について知っておるのでしょうか？」

二人にしか聞こえない程度の囁きに、戸惑いながらもかすかに頷く。神官長は目を細める。

「ほうほうほう、どれ、わしは神付きの方と話してくるかのう」

来た時と同じように笑いながら去って行く姿にもう一度頭を下げた。

神殿を去る時、緑色の目をした人がこちらを見つめていた。

（たぶん、神官様が言っていた神付きの人とはあの人のことだわ）
頭を下げようとしたけれど、その人はそのままどこかへ行ってしまった。

「悪いことをしたわ」

「フィオ レ様何か言いましたか？」

「いいえ、何も」

数回、横のかごがさがさごと動く。

「にゃー、にゃー。にゃーん、にゃーん（おーい、出してー。メイ
ドさん、フィオ レさん）」

「あら、起きたみたい。出してあげないと」

かごの中を覗くと青い目と視線が合う。エクラのそれよりも深く、澄んだ青の目は、神殿で見た緑色の目と重なった。

「起きたのね、ソラさん」

体を優しく包むようにして、抱き上げる。

「にゃ、にゃにゃう。にゃん。にゃんにゃんにゃー（えー、何何？
近くね？ フィオ レさんってば、俺にそんなに会いたかったの
？）」

胸に顔をすり寄せる想良。

「フィオ レ様、それ近くありませんか？」

「そんなことないわよ、エクラもしてみたら？ 毛がふわふわして
て気持ちいいわよ？」

怪訝そうなエクラに微笑む。

（神様、あなたの現の姿である猫を利用することをお赦してください）

愛すると誓います。
守ると誓います。

ぐうつと鳴ったお腹の音にクスツと笑う。

「ふふふ、ソラさん。家に帰ったらすぐご飯にしてあげますからね」

「にゃあんなう（希望は味付けの濃い美味しい料理でー）」

（ソラさんが、私の命尽きる日まで、慈しむことを神に誓います）

11・神殿、神官、美人が居ない！4 (side:フィオレ) (後書き)

皆、事情と思惑があるんですよ、ってことで。

次回は神官長とのとある方のお話。需要(下心)ないので、想良と
のご飯のお話しも一緒にうpできるといいなw

12・嗤う人（side：神官長）

執務室の中に置かれた唯一の椅子に男が座っている。女かと思紛うほど美しい男だ。銀の髪、緑色の目は宝石のに美しいが感情がないかのように冷たい。

男は嗤う。

「花バラのためウマにフロルを、人間が口にすると嗤えるのだな」

「相変わらずお耳が宜しいですのお、ほうほうほう」

こちらが笑うと、緑の色が深くなった気がした。

「言い訳ぐらい聞いてやろう、お前たちからするとわたしは仲間内で三番目に優しいのだろう？」

否、目だけではなく今や髪も深い緑色に染まっている。

深い深い緑は風の色。

「神と言えど、人の風評は気になりますかな？ リュズギヤル様」

目の前の男は 彼かのじよの人は美しく嗤う。

「くはは、気になるはずもない！ 所詮、人の戯言。事実、あれらよりわたしのほうが幾億倍も優しいしな」

膨らんだ胸元、丸みを帯びた体。目の前に居た男はもう居ない。

「何、彼女が今代の花なのではないかと思つてのこと。神官はその為だけに居るのですからな」

「あれが花？ わたしは何も感じなかつたがね」

「花の可能性は否定できませんまい。青はあの方の色。毛は白くとも連なる何かでしょうぞ」

神は人の姿を偽ることはできても、猫の姿を偽ることはできない。連れて来られた猫は毛は白かったが、目は深い深い青だった。あれは神の色。アーグアの色。

「だつたら、なぜ手放す？ あの娘の願いとは何だ？ アーグアの魂が目覚めたことはすでにわかっているのに、何を考えている？ 世界に馴染む前に見つけなければ、滅ぶのは貴様らだぞ？」

リュズギヤルは顔を歪める。人とは違い、歪めても美しい。

「神さえも寄りつかぬ深淵などにはあれは眠っていないのに、信じて、祈つて……。何度も言うが、あれは我々とは違う。根源から違うのだ」

「無論、存じております」

アーグアの神話と、事実は異なる。

花のためだけに世界を滅ぼしかけたアーグアは、他の神によって体と魂を分かたれた。

彼の人は花が見つかったても、世界を滅ぼすことをやめなかった。むしろ、一層怒りを強くしたのだという。

「口先などではなく行動で示して欲しいものだ。いいか、滅びたいなら、勝手に滅びろ。我らを巻き込むな、二度目も助けて貰えろと思っなよ」

人に穢された花。

神の愛した花を人の輪廻に神々が加えたことにより、人々は滅びを免れた。

花を生かすためだけに、人は生かされている。

「フィオレ・ブルームの願いは俗世からの解放。猫のこととて、彼女が花なら安い犠牲というものでしょうに」

高位の神官になってその真実を告げられた時、神官になったことを後悔した。

いつ世界が滅びるのかと、按じなければならぬのは人の身には重
すぎる。

「花ならばな」

ゆったりとリュズギヤルは立ちあがる。

「プロクスも花を見つけたと言っていたが、一体誰が花なのだろう
な？」

「プロクス様が？」

「ああ、やけに自信满满だったが……貴様とあれとどちらが正しい
のか見ものだ、な。無論、このことは非の無いように伝えてや
ろう、くふふ、ははは」

嗤い声が風となって、体を通り抜ける。

声が止むころにはもう、誰も居なかった。

『バラ ウマ フロル
花のために』

かつて、アーグアが世界を滅ぼそうとした時口にした言葉。
今は、人が花に償うために口にする言葉。

神官長は、祈る。

彼の人らの慈悲が人間に有らんことを。

12・噓う人 (side: 神官長) (後書き)

小難しい話は体力がなくなる……2話うpとかムリやった。

「Parasuma flor」はポルトガル語で「花のために」
だけど、翻訳サイトで翻訳したからあってるかは知らないという

w

13・夕食という名の液体

皿の中身を想良はジッと見つめる。

フィオレの座る食卓のものはどれも美味しそうなものばかりで、目の前のそれとは天と地の差がある。

『だ、誰が用意したのかは知らないけど、さ……こんなもの喰えるかっ！』

そっぽを向いて、食卓を指す。

帰って来た頃には既に食事の準備ができていたことから、この屋敷にはまだ誰か居るのだろう。現在は、姿も音もまったく感じないのでもしかしたら日中帯だけ働いているのかもしれない。

『絶対、これは無理い』

これならあの市場で見た魚の方が幾分マシである。

転げまわって、「うおおおおおっ」とか言いたいぐらいありえない。

『フィオレさん、あんなの俺は喰えないー！！！』

無臭の真っ黒なでろーんとした液体が並々と注がれた皿を指差す。

「どづしたの？ 猫さん」

「お前の食事はあつちだぞ」

二人は不思議そうに想良を見る。

『だ、か、ら、む、り、な、の、っ!』

フィオ レが小首を傾げる。

「食べたくないのかしら？」

「まさか、猫はあれが好きだと昔からいうじゃないですか」

どうやら、あの黒い液体はこの世界での猫のご飯らしい。

(も、もしかして、あれ、向こうの世界で言うところの牛乳なの？

猫、魚も食べるよ！)

「ほら、お前の飯はこっちだ」

エクラが想良の体を皿の前に持って行く。今回は首根っこを掴んではいないが横腹をがちりと掴むようにしてなので、やはり胸とは距離がある。

『やーめーれー』

手足をバタバタさせながら逆らう。

『いやいやいあああああっ、食べないいいいいいいいいっ!』

液体を蹴散らす勢いで暴れる。

人間として十七年生きた想良にとって、この摩訶不思議な食べ物
食べ物として認識されなかった。

「明らかに嫌がってるわね……、なんでかしら？」

「もしかして、食べたことがないのでは？」

エクラは片手で想良を持ち直すと、右手の人差し指と中指で液体を
掬う。ゼリーのように液体は皿の中でぷるんと揺れる。

『きもい。きもいを通り越して、きもい！』

ジェルのようなそれは指に絡みついている。色が白なら、「エロい」
と叫ぶところだが黒である。エロさの欠片もない。

「あーん」

男がいつか彼女に言われてみたい夢の台詞をエクラが言う。

（美人だしね、いいよ、いいけどね、この状況はいただけないぜ！）

美人の手に液体。

美人の指を舐めてもよし、噛んでもよし。

しかし、胸とは距離がある。

以上、現状解説。

『オナカイツパイナノデ』

ぐう。

(切なく鳴った腹、空気嫁っ!!!!!!!!!!!!)

口の中に突っ込まれた指に絡まる液体のあまりの不味さに猫は泡を吹き、令嬢は悲鳴を上げる。
ただ、メイドだけは職務を遂行したことに満足し、頷いた。

閑話・水縁想良（side・凜）

母が兄だったものに縋って泣いている。

声を殺すこともなく、鼻水も零して子供の様に泣いている。

兄の友人たちがそのすぐ傍で泣いている。

「起きろ、起きろ」ってうるさいくらいの声で怒鳴ってる。

（僕が死ねばよかったのに……）

助かった人間が言っではいけない台詞しか、頭に浮かばない。

だって、僕が死んだとしても母はあんな風に泣かないのを知っている。

友達だってそうだ。誰もあんな風には嘆いてくれない、悲しんでくれない。

なんで、庇った。なんで、身代わりになんかあった。

僕は泣けない、僕は泣かない。

あの中に入れない僕なんかをどうして庇ったんだ。

「凜、先に家に帰ろう……」

あの中には入れない二人　父と僕は少し離れ場所でそれを見てる

しかない。

何も言わずに首を振る。

家にもどこにも居場所なんてない。どこに帰ればいいのか、わからない。

兄、水縁想良は周囲から浮いていた。

独特の雰囲気纏っていたせいだと親しい人は言うだろうけど、僕から言わせれば人間に興味がなかった故に浮いていただけだ。

気に入ったものだけに自分を見せ、興味のないものは視界にすら入れない。それが兄の実態だ。

僕は弟だったからこそ「凜」という名前を覚えて貰えたけれど、もっと長い名前だったら兄は覚えなかっただろう。母親の名前を兄は知らない。この友人たちとて正確には覚えてもらえてない。父なんて父親とすら兄の中では認識されていない。

なのに、愛されている。

内側からも外側からも愛されている。

(ずるい、ずるい、ずるい)

青い目を細めて、僕は笑ってほしかった。かまってほしかった。

母さんと貴方が呼んだ人は、水縁^{ほたる}虫。
ヒロと貴方が呼んだ人は、前島^{まえじま}ひろと
小坂と貴方が呼んだ人は、十時^{とこぎ}此方^{こなた}。

深い緑の傘を兄が持つとオヤジ臭いから大人っぽいになる。
黄色い傘を兄が持つと子供っぽいから鮮やかに変わる。

好きなように人の名前を呼んで、好きなように生きて、なんで
愛される？

兄との買い物なんて行きたくなかった。
めんどくさいという雰囲気を感じるともしないその姿が嫌だった。
オヤジ臭い緑色の傘に耐えられなかった。
早く家に帰りたくて急ぎ足だった。

ぽつぽつ、ザーザー。

雨は次第に酷くなって、いく。

「喫茶店に入って、時間つぶすぞ」

スーパーの外を見るなり、兄が言う。

行きよりうつすらと霧がかかっているようだった。

「別にいいよ」

僕は制止を振り切る。

とことこ走る、ずんずん歩く。

霧がもつと深くなつたみたいだった。

「凜っ！」

家まであと二百メートルもない場所だった。

少し大きな道路を渡ったら家だった。

白い霧の中でライトが光る。車だつてすぐにわかった。

でも、僕の体は動かない。石みたいに固まって動かない。

体をどんと突き飛ばされた。

持ってた卵はぐしゃり。

視界に嫌だった黄色い傘が見えた。

車から人が降りてくる。

兄は雨に打たれて動かない。

閑話・水縁想良（side・凜）（後書き）

これにて、第一部「麗し令嬢に飼われよう」は終了。

なんで、これがオチなんだよ、と思うかもしれないが……なんか、書きたくなった。気が向く度に、弟や友人の話は出てくると思います！

次回か、次次回には新キャラとロリっ子が出てくるよ！…ってことで第二部「猫の暮らしも楽じゃない」をお楽しみに。

14・見えない影がうつろちよろり

『いいか、シャルロット。今日こそ、料理人を見つけんぞ!!』

「ぐげ、ぐげっ！」

バサバサと揺れる羽根を見て、想良は満足げに頷く。

あの悲劇の黒い液体事件から、三日が経とうとしていた。

白い猫の後ろから不気味な生物が楽しそうに付いて来る。
不気味だった顔も見慣れれば愛嬌があるように見えてくるのだから、
不思議だ。

(今日こそ、この家の見えない住人を見つけてやっし!!)
鼻息を荒くして想良は探す。

別に、三日間寝込んでいたわけじゃない。
確かに、あの黒い謎の液体のせいで意識はぶっ飛んだが、すぐに意識を取り戻した。

そして、目覚めるなり料理人に対し殺意を覚えた。
復讐を決意した殺人犯の心境。はたまた、犯人を見つけ出そうとするサスペンスドラマの探偵の心境とでもいうのか。
見つけ出して、ぼっこぼこにしてやると、猫の体だということも忘れて真剣に思った。

(やや、メイドさん発見！)

気付かれないように、とシャルロットを黙らせ、こっそり柱の陰から見る。

今やこのエクラも料理人に比べれミジンコ並に気にもならない(今も彼女の胸だけは、別である)。

この三日間探しているが、毎日毎食、食卓にはあの黒い謎の液体が出て来るのに対し、この家の人間はフィオレとエクラ以外匂いも気配も感じない。

猫の体になつて異常に耳や嗅覚が良くなったので人の気配があればわかるはずなのに、だ。

あまりにも見つからないので当初はやはりエクラが犯人なのではないかと疑ったものの、彼女を丸一日ストーカー並のしつこさでマークした結果彼女はシロだった。

彼女は厨房と思しき場所にはお茶や水なんかの飲み物系を取りに行く以外まったく近寄らない。

仕事と言えば、フィオレの傍で甲斐甲斐しく世話を焼くぐらいだ。

(メイドさんより絶対見えない人物Xのほう^{エックス}が働いてると思う、俺

だったり?)

ちよつと部屋が汚れていても気がつけば掃除されているのなんて当たり前前で、これも料理人に違いない。と、想良は踏んでいた(エクラに箒やなんかの道具が似合わないという偏見もあるが、ストーキング中に汚した場所がいつの間にか片付けられていたためである)。

(てか、今日もロングじゃん! ちっ!)

舌打ちをする。

制服なのだろうが、同じロングのメイド服ばかりで想良は見飽きていた。一向に胸が露出されるような服をエクラもフィオレも着る気配がないのだ。

フィオレも色や形こそ様々だが、基本は首元まで覆われたドレスばかりだ。

(二人とも男心がわかってない! 胸には夢と浪漫が詰まっているに!! ちなみに、俺の男心としてはメイドさんのロングスカートの中身がガーターベルトなのか、パニエなのかも気になるうつつうつつ!!)

ハンカチがあつたら「くやしいきます」と、噛みしめたい。

ストーキング中に確かめたくて階段の下から覗こうとしたが、不穏な気配を察知されたのかジッと見られてずこずこ引き下がるしかなかった。

『メイドさんの服がどっかに引つかかかって破けるか、もう少し薄い生地になって胸が強調されるといいのにいー』

言葉がわからないことを良いことに言いたい放題言ってみる。
シャルロットが「ぐげえっ」と何か言いたそうに鳴いたがわからないので、知らん顔で通す。

いつまでも見ていてもしょうがないので迂回する。

『行くぞー』

「ぐげっ」

ぶらぶら揺れる尻尾が心なしかしょんぼりしてる気がした。

14・見えない影がうつろちよろり(後書き)

予約の時間が間違ってた……あぶね。し、新キャラいつ出んだろ？

15・見えない影がつろちよろり2

不意に、思った。

(そついや、猫なのになんでシャルロットの言葉わかんないんだろ?)

人間とコミュニケーションできないのは仕方ないと、思う。猫が「ハアイ、俺想良っ！」なんていきなり喋ったら夢かなんかだと疑いたくなるのでそれはいい。

だが、シャルロットは同じく動物で、何やらあちらさんはこっちの言葉を理解している節がある。

(んー、他の生き物が喋ったの見たことないし、コイツもしくは俺が特別?)

「ぐええげ?」

(ないない)

この間抜けな鳴き声を持つ生き物が特別な訳ない。

(無駄なことは考えない。面倒ごとは知らんぷり、これ、鉄則)

がぶ。

『おいこら、何ひとの尻尾くわえてんだ、あーん？ 喰うつもりなら容赦しねえぞ』

爪をキラリと光らせる。

「ぐ、ぐげえ」

シャルロットは「違う」と言いたげに首を振る。

『じゃあ、なんだよー、ぶうぶう』

「ぐえ、ぐえ」

翼をバサバサと動かすが、理解できない。必死にやられるほど理解できない。

『さっぱり、ぼん』

（わからないことはわからない。深くは知らない、考えない、これ鉄則）

『あ、俺超名案思いついた。厨房見張ろつと』

シャルロットが何を言いたいのかを理解するのをやめ、厨房へ向かう。ずっとあそこに居れば絶対に会えるはずだ。

「げげぐわあああ」

切なく鳴かれても、理解できないものはできない。

『置いてくぞー』

だから、シャルロットの赤い目に二人以外の人物が映ったなんて
良に理解できるわけなかった。

できたら、きちんとその姿を見ることができたろうというのは、
言っても意味の無い話である。

『あーあー、こちら厨房。こちら厨房。えー、現在、異常なし』

誰に知らせるわけでもないが、言ってみる。

『間もなく昼の準備のために敵はやって来ると思われるので、絶対
に目を離さないように！』

「ぐげっ」

厨房の入り口で猫と鳥もどきはしゃんと背筋を伸ばし、あの黒い謎の液体を作る料理人を待つ。

五分経過　猫は小さく丸まって寝息を立てていた。

『ぐう』

「ぐげ」

くちばしを使ってシャルロットは想良を起こす。

『ふへ、っ、寝てない、俺、寝てない』

ぶるぶると首を振ってしゃんと背筋を伸ばす。

『くわああ』

大きなあくびを一つこぼす。口をもぐもぐさせながら、想良は青い目をきよるきよるとせわしなく動かす。

『シャルロットー、そっちなんか居ないわけえ？』

想良は人を待たせることはしても、待つことは大嫌いだった。

暇なのが苦手なのだ。

どんなに重要な場面だろうが、どんな場所だろうと一定以上のめんどくさいことや暇なことがあると寝る。
まさしく、駄目人間の鏡である。

前回の神殿の時もそうだった。十分した時点で興味が完全にあの場所からなくなり、ふかふかクッションの誘惑に屈した。

『料理人が美人さんじゃなくても、今現れてくれさえしたら許すかもお』

冷たい床の上をごろごろと転がる。

このまま汚れたらエクラと風呂で一線交えることになるのだが、頭の中からそれは削除されている。

『あー、あー、あー、つまんないー』

「ぐげげえ」

くちばしで体をがばっと抑えられる 風呂決定の瞬間。

『なんだよ、なんか一芸披露でもしてくれんのかよお、暇なんだよ、暇俺嫌いー』

羽根で覆われている翼を見る。

（抜いてたらいい時間つぶしになるんじゃないだろうか、あれ。でも、周りぬるつぬるだしなー）

「ぐええ」

一歩、身の危険を感じたのかシャルロットが下がる。

『た、い、く、つ』

眠たいのを我慢して待つが、目蓋がしゅぱしゅぱして徐々に、起きていられなくなる。

すぐ近くなのに、かすかな足音が聞こえた。足に羽根でも付いているみたいに軽い足音。

「ここで寝てはいけませんよ」

『ひゃあいっ。』

髪の色が見えたけれど、赤色なのか金色なのか違うのかわからない。
優しすぎる声だったので、フィオレだろーと決める。

抱きしめられた感覚が少し違う気がしたけれど、甘い匂いがした。

15・見えない影がうつろちよろり2(後書き)

はい、新キャラ！ 顔はそのうち見えるよ。うん。

16・来訪者

嗅ぎ慣れた匂いと、感触にパチリと目を開ける。

『ありい？ なして、ここに？』

丸いかこの中にビーズクッションのような触り心地のクッションが詰められたここが想良に与えられた寢床だ。

毎日、甘い香りの香水がふつてあるようで、ここはとても良い匂いがする。

甘い甘い花の香り。

フィオレからする匂いと似ていてここは心地が良い。

(もう、ひと眠りい……)

『つて、違う！』

(なんで、ここに！ 俺は料理人を探しに厨房で見張ってたはずなのに！！)

ぴよんとかごから飛び出す。

窓から入ってくる陽の高さからいってあまり時間は経っていないだろう。多く見積もっても二時間、少なければ三十分程度ぐらいの間だろう。

(つつても、時計がこの家の中にはないから正確な時間わかんないんだけど、ね)

この家には時計がない。それどころか、街でもそれらしいものはみなかった。

街では時間を知らせるために時々鐘の音がしたが、ここではそれもない。

『時計がないのって不便。ケータイ欲しい。ゲームしたい、って、これも違う、違う』

(今は、一体どうやって料理人を捕まえるかを考えないといけないんだ。ただ時間経ってるか知んないけど、もうそろそろ苦痛のあの時間だろうし)

食事の時間となると、どこで何をしてもエクラがやって来て首をガツと掴まれ、その瞬間「ああ、食事ね」と思うようになっていた。

(いきなり毎回掴まれるからすっげえビビるんだよね、メイドさん気配ないし)

ちよつと開けられたドアから出る。

(あ、そういやシャルロットはどこだろう？ あの時、フィオレさんを見た気がするし、一緒にどこか行ったのかも)

探すべきかとも思ったが、何かあるとくわえようとするのを思い出して想良は一人で料理人を探すことにした。

（付いて来ようとするのを拒むのには骨がいるけど、居ないなら無理に探す必要はまったくないもんね）

想良の部屋から厨房には少し距離がある。

人間の姿ならそんなに感じないのだろうけれど、猫の足だと必死に動かさないと人と同じスピードにならない。

必死に体を動かすというのは、めんどくさがりには辛い仕事だ。

家は三階建てで、想良の部屋は二階にある。

フィオ レとエクラは三階に部屋があるようだがそちらには行ったことがないというより、エクラに行かせて貰えていない。シャルロットと一緒に探検していても、三階の階段に足を掛けた瞬間、階段からひよいっと引き剥がされた。

（シャルロットは良くてなんで、俺が駄目なわけ？ 不公平くないか？ 性別差別とか、いじめ反対！）

下心があるのは棚に上げて憤る想良であった。

下の階に下るとすぐに、ホールが広がっている。大きな玄関を出ればすぐに、外だ。

（今回は厨房なので右手のほうに曲がるー、俺ー）

食卓のある部屋の隣が厨房である。
一々、運ぶなんてご苦労なことだ。日本ならキッチンでそのまま食べるのに。

『うやあ？　なんか、外騒がしいんでない？』

右に曲がり切ろうとしたところで、バンと勢いよく開かれた。

見ると、扉の外には子供が居た。金髪に青い目、フィオレを小さくして幻想的な部分を一切取り払ったらこんな感じになりそうな女の子だ。

(七歳ぐらい？)

「きゃあああああつ、猫さんだわああつ！　ククも欲しいのです
おー」

ダダダと淑女にあるまじき走り方をした子供はそのまま想良をぎゅうつと人形でも抱きしめるかのように、抱きしめる。

『ぎゅへっ！！！！！！！！！！』

「やあん、可愛いー」

抱きしめられ、振り回される。

どうしようもない呼吸の苦しさに想良は子供から離れようともがいた。

『め、目が廻るー、離れーろー、爪立てんぞおっー』

想良は女性にのみ優しい紳士である。子供も女の子ではあるが、生命の危機を感じた場合は女子供関係ない。

(敵は敵!!)

爪を出した。

17・なんで？

予想外。ただ、この一言に尽きる。

爪は子供の肉を引き裂くはずだった。加減はできなかったなので爪を立てていたら服だけではすまなかっただろうことは言えるが、とにかく、彼女の手を傷つけるはずじゃなかった。

「爪のあとは残りやすいというのに……女は傷痕を残すものじゃないんだぞ、馬鹿猫」

エクラの茶色いメイド服に深々と刺さった爪。服には大きな穴が開いている。

(やばい、やばい)

「反省しろ」

ぺちりと、額を叩かれる。

痛くないのに、痛くて、痛くてたまらない。

反射的に、爪を引っ込める。加減できなかったそれは、服の下の柔らかな肉にもつき立てられたはずだ。

『ごめん、メイドさん、ごめん。俺そんなつもりじゃなかったよ、ほんとだよ』

(その子には、爪を立てる気だったのは否定しないけど……そんな気じゃなかった)

女は傷痕を残すものじゃない。

服のせいで傷跡がどんなものか想良にはわからない。エクラの表情からも窺うことはできない。いつもと同じように冷たい目がこちらに向いているだけだ。

エクラのことを好きか嫌いかで言われたら、「どっちでもない」と答える。

じゃあ、なんと思っっているのかと聞かれたら、「苦手」とだけ答える。

扱い方が彼女は雑だ。

フィオレと比べると猫を扱うというより、雑巾を扱うようにしか感じない。優しくされないのは苦手だ。

(俺が優しくしないのはわかるけど……もう、メイドさん理解不能!! 傷どうしよう……責任とって嫁!! いや、俺今猫だし……どうする? アイフ……っ違う! ああああああっ!)

唸っても、考えてもわからなくて、どうしようもないバツの悪さだけが胸を占める。

「この子、ククに怪我させようとしたわっ! レディに怪我させよ

うとするなんて、悪い子っ！！」

手の中の生き物が牙をむいたことをやっと理解したらしい子供がぶ
うっと頬を膨らませ、小さな体を投げ捨てる。

これ幸いと、想良は逃げた。

くるっと、回転しながら地面に下りる。

振り向けば、自分と同じ色の青い目はこちらをまだ見ていた。

『謝ったから、俺もう、悪くないもん！　メイドさんには悪いと思
うけど、ちびっ子には謝らないしっ！！」』

ダッシュで逃げる。とにかく逃げる。ひたすら逃げる。

厨房に行くのも忘れて階段を上って、自分の部屋に飛び込んで一番
高い棚の上で丸くなる。耳も塞いで、目も瞑って。

（嫌なことは聞かない、嫌いなことは見ない！）

棚の上で、猫が鼻を啜りながら鳴く。

気がつくと思良は泣いていた。なんだかよくわからないけど、涙が
出るのだ。その上、やたらとしょっぱい。
好きな子に振られても、どんなに怒られても、死んでもこんな風に
泣いたことはない。

「ぐええげ？」

ドタバタと足音がしたかと思えば、棚の下にシャルロットが居た。

『ジャルロツドーう、お前俺の舎弟だろ！ ぬわぁに、一人でどっか行つてんだよ、ばああか、わーん！ フィオレさん、優しくなぐさめてええ！ メイドさんごめんよおおっ！！』

猫は鳴く。力の限り、大きな声で。

誰か聞いてよ、俺、今悲しい。

わかんないけど、悲しい。なんで、悲しいのか理由をきいて。

小坂なら訊いてくれるのに、ヒロなら聞いてくれるのに。なんで、聴いてくれないの？

母さんや大人はあんな風に怒らないよ。

メイドさんの目はどうしてあんなに冷たいの？

メイドさんはだって、俺をキライって目で見るんだ。

俺が嫌いじゃなくて、メイドさんが俺を嫌いなんだ。

なんで、なんで、なんで、なんで！？

嫌われるのは平気、畏敬とそれは似てるから。

恨まれるのは平気、嫉妬とそれは似てるから。

憎まれるのは平気、愛欲とそれは似てるから。

平気、へいき、へいき。

なのに、俺は今は平気じゃない。なんで？

猫は知らない。

愛されてばかりだったから。

綺麗なものばかり選んでみてたから。

純粹な敵意や、嫌悪といった負の感情を知らない。

知らないことは理解できない　　想良は理解できない。

117

『わーん、わーん!』

怒られて泣くのは、後悔しているわけじゃない。反省していたわけじゃない。

優しい誰かが慰めてくれるのを待ってただけ。

『わーん、わーん!』

窘める時、人はどこかで「想良ならしょうがない」と思っていてくれた。

けど、その誰かはこの中にはいない。
ここじゃ、想良の言葉を誰も理解できない、きけない。

『わーん、わーん!』

怒られたことはあっても、叱られたことがなかった。

自分を嫌いだという人たちの目の中に、羨む気持ちがあったのを知っていた。

自分を影で笑う人たちの心の中に、妬む気持ちがあったのを知っていた。

猫になって初めて想良は叱られることと反省することを知った。

『わーん、わーん! 理解不能、意味不明っ!!』

大きな声で猫は鳴く。

理由もわからないけど、想良は泣く。

17・なんで？（後書き）

想良は甘やかされたまま大きくなった子供なのでいきなりですが、成長させようと思います。本当はもう少し先でそうするつもりでしたが、今回は別の伏線も入れるためにここでボコります……とところで、ヒロインってフィオレさんなの？ エクラさんなの？ エクラさんでばりすぎじゃね？ おかしいな） - - ;

そろそろ、食事の時間なので想良を探しに出ようとしたエクラは窓の外に人影を見た。

「あれは、フリンデッル様？」

フィオ レに良く似た男と小さな少女が馬車から下りようとしていた。

男の名は、フリンデッル・ブルーム。次期ブルーム伯爵にして、フィオ レの異母の兄。少女はその娘、クークラ・ブルーム。

フィオ レもそうだが、彼も年齢よりかなり若く見える。

二十と言う年齢より、フィオ レは三、四歳ほど若く見える程度だが、フリンデッルは二十代前半にしか見えない。

(記憶が正しければ三十に届く年齢のはずだが……)

娘のクークラは見た目と同じ七歳程度の年齢にしか見えないのに、遺伝子の異常を感じてしまう。

彼女も大きくなれば二人の様に見た目よりどんどん若くなるのだろうか。

「迎えに行かねば……」

客人の来訪にエクラは溜め息を吐いた。

(フィオ レ様に迷惑を掛けねばいいが……)

玄関に向かうと門をくぐることを許していないのに、娘の方がすでに中に居た。

腕の中には想良も居る。

(彼らはやはり厄介な客人だったか……)

「やあん、可愛いー」

クークラは人形にするように猫に力を込めている。

(あの馬鹿猫は気が長いほうではないのに……)

止めないうちに、想良は爪を出した。だから、エクラは自分の手でそれを止めた。

「爪のあとは残りやすいというのに……女は傷痕を残すものじゃないんだぞ、馬鹿猫」

「反省しろ」と、猫の額を軽く小突く。

想良と目があった。

（「どうして？」）

ジッと見るその目に見覚えがあった。あれは理解できない出来事に遭遇した人間がする目だ。

驚愕し、絶望し、泣きそうな少女と蚊の鳴くような小さな声が頭の中に浮かぶ。

守ると決めたのに、守れなかった少女と目の前の一匹の猫が被った。違う色の瞳なのに。

猫は上の階に向かって走っていく。

「あ」

にゃーにゃーと、鳴く声に傷が痛んだ。こんな小さな傷口、痛くないはずなのに。

「おとうさま！ 聞いて、クク、フィオお姉様の猫さんに怪我させられそうになったの！」

クークラは、エクラを振り払って飛び出す。

「^{レディ}おやおや、それは君が悪いことをしたんじゃないかな、^{リトル}小さなお嬢さん？」

いつの間にかプリンデッルも入って来たようだった。

（許していないのだが、……元々ここはブルーム伯爵のものだし、

仕方ないな)

「ククそんなことしてないわ!」

ぷうつと顔を膨らませるクークラにフリントデルは笑う。異母兄妹だけあって、クスクスと笑う顔はやはりフィオレのそれと重なる。

「フリントデル様、ようこそお越しくださいました」

淡々とお辞儀をする。

「突然の来訪失礼するよ」

外された帽子とコートをすかさず預かる。本来の仕事ではないがメイドらしく。

(こういうのはスキアーがすべきなのだが……、どこかで啜ってそうだな)

影は影らしくどこかにいるのだろう。

見えないこの家の住人、スキアー。自分と同じくフィオレのために準備された従。

「ねえ、エクラ、あの子はどこかな？　ちょっと、怒りたいのだけれど」

口調は柔らかいがフリントデルの言葉の端々から怒りを感じ、エクラは考えるのをやめる。

「ダイニングルームに居られますが……?」

「ああ、警戒しなくていいよ。僕は、純粹にお説教に來ただけだから。ねえ、君知ってた？ 猫をフィオ レが飼うつもりだって」

「フィオ レ様がお決めになったことに意を唱えることはありませんん」

白い手袋をした手は呆れるように頭を搔く。

「あの人は何も言っできてない？」

「ここ暫くはあの方からご連絡はありません」

「あー、てことはやっぱり知らなかったんだね、君」

盛大な溜め息に、眉尻を上げる。

(回りくどい男だ)

「良く、聞いてね。貴族は猫を飼おうとすると籍を返還……つまり、貴族じゃなくなるんだ。これどいう意味かわかるよね？」

良く似た翠の目に、血の気が引いた。

「陛下からそのうち連絡が来ると思う、まったく、フィオ レはいっつになつたら大人になるんだろうか」

『悪いことをしたわ』

馬車の中で彼女が口にした言葉の意味を今更ながらにして、知った。

フィオ レとエクラが出会ったのは五年前だ。

今のフィオ レより、一つだけ若く、エクラは盛りだった。女としてではなく、騎士としての盛りであったけれど。

陛下直々に、彼女を守ることを任されてエクラは舞い上がった。

女の騎士は珍しい。後ろ盾のない自分がやっと認められたのだと思
った。

ただ、男と彼女が接する機会を減らすためでしかなかったのに。

側室にと望まれた美しい娘の末路は決まっていたのだろう。

身分にも申し分がない少女が寵愛を受ければどうなるか、どうやれ

ばその腰入れがなくなるのか。

実力も、緊張感も足りていなかった。慢心だらけで、守れるはずもなかった。

守れなかった少女は　フィオレがすぐそこであの時と同じ目をしてこちらを見ていた。

「お兄様、お早いおつきね。もっと遅くてもよかったのに」

笑う、けれど、笑わない。

背中に入った一文字に彼女は呟く。

『どうして？』

何も知らない、ただ美しいだけで愛されていた少女は理解できない現状に呟いた。

死ねばよかったと少女は言った。
修道に入りたいと少女は言った。

貴族なんかに生まれなくなかったと少女は言った。

なにも赦されたなかった少女は大人になって、赦されることを諦めたのだと思っていたけれど、美しい仮面の下で爪を隠していただけだった。

「エクラ、ごめんなさいね」

謝罪は、罪を認めること。

彼女は誰のことも何も赦すことも、信じることもなかったのだろう。この五年間。

それを、知った。

18. どうして？ (side: エクラ) (後書き)

過去が徐々に見えてきますた。新キャラはスキアーさんです。容姿はもう間もなく……出てくるか、な？

19・疑問詞すら浮かばない) side:フィオレ)

なんで？

どうして？

昔ならすぐに浮かんだ疑問詞すら浮かばないことに、気付く。

外の騒がしさにダイニングを出てフィオレが見たのは十二違いの異母兄、フリンデルだった。

(……五年って長い、のね)

心の代わりように、少しだけ、ほんの少し泣きたくなった。

早すぎる来訪と裏切りの発覚に、無邪気な顔で笑う。をゆがめる

「お兄様、お早いおつきね。もっと遅くてもよかったのに」

フリンデルの見下すような瞳にも怯まない。

綺麗に笑うだけの心ない、愚かな人形が彼らの望みだと知っているから決して怯まない。

怯むことは屈することを意味していた。

「エクラ、ごめんなさいね」

正直言えば、エクラの存在をフィオレは気に入っていた。彼女のおかげで自分と言う存在がどれほど虚しいか気づけたのだ。

エクラは、手放すことを好しとしないあの人に一つだけ願った存在。

(信頼と好意が同意でないのが、悲しいわ)

青は悲しみ。アーグアの色。

メイド服に身を包んだ女騎士は何も言わない。言わせない。中途半端に助けた彼女がいけないのだ、あのまま死ぬことこそが最善だった。

「お前はいつまで経っても子供だね、陛下は背中傷を気にしないと言ってくださっているのだ。それなのに、首をなぜ縦に振らないのか理解できないよ」

「傷物などあの方には不要でしょうに。第一、私ごときの代わりならいくらでも居りますわ」

見た目の良い娘など腐るほど居るのだ。

「フィオお姉様！ 我儘を言うてはいけないのよ!」

「我儘ではなく、事実を言っているの」

死ぬことも赦されず。

出奔することも赦されず。

何も赦されないのはあの人の執着のせい。

「何も知らない子供はお黙りなさいな」

いずれ、クークラも大人になれば知る。女など政治の道具でしかない。

「お、お姉様、ひどいっ！」

すぐに泣くのは子供の証拠。大人は泣くことを赦されない。この身は何も赦されない。

泣き落としてもさせるつもりでクークラを連れて来たのだろうけれど、フィオレの心は痛まない。

些細なことで痛めていては人は生きていけないのだ。

「もう書類は出してしまいましたもの誰にも手出しはできませんわ、例えあの人でも」

スキーアがこの会話を聞いていて、あの人に伝えたとしても。

「時既に遅しって、いい言葉ね、ふふふ」

きつくフリントデルが睨む。

「恥知らずな……」

「恥知らずで結構。お父様にでも何にでも継るといわ、お兄様。私は好き好んでこんなところに居るわけではないのですから、出してくれたらそれこそ幸いというものです」

死んでもいい。

出奔してもいい。

生きることを望まれないのならそれでいい。

「フィオレ……」

「お帰りになるといいですわ」

綺麗なだけを望まれたフィオレ・ブルームは五年前に死んだのに、誰も気付かない。

笑いながら場を離れる。

必要とされたフィオレ・ブルームは居ない。

ここにいるのは壊れたフィオレ・ブルームだけ。

(壊れたものに執着するなんて、皆馬鹿ね)

自分の部屋に向かう途中で、鳴き声が聞こえた。

「ソラさん？」

高い棚の上で猫は鳴いている。

「どうかしたの？ 高くて降りられないの？」

手を伸ばす。

猫はにゃーにゃーと、鳴くばかりでフィオ レに近づかない。

「誰かにいじめられたの？」

泣かないで。

泣かないで。

泣かないで。

想良の声がフィオ レの耳には泣いているように聞こえた。

「大丈夫、私が居るわ」

私も悲しいの。

私も悲しいの。
私も悲しいの。

「おいで」

白の塊はゆつたりとフィオレの腕の中に降りる。

「私も悲しいわ」

鼻先にちよんとキスをする。

疑問視など浮かばない。

いつだって目の前の現実が答えなのだと思ったから。

20・目の前の現実が答え

水縁想良は人間。

ソラは猫。

水縁想良は自分が猫のソラなのだとなつて理解した。猫のソラになつたのに人間の水縁想良のまま生きていた。

『違う！ 俺はソラなんかじゃない。水縁想良なんだ！ 人間なのに、嫌だ。嫌だ、帰りたい。こんなところ、やだ』

顔は良い方だった。スカウトもされたことがある。勉強もスポーツもなんとなくできた。ちよろいもんだった。人間付き合いだつて自分で選んだ。気に入らない人間は見ない、知らない。

水縁想良は愛されて、世界の中心だった。特別だった。ソラの世界は残酷で、冷たい。愛がない。

手に毛が生えている、これは前足。
耳に、鬚。尻尾。この体は人間の時とは違いすぎる。

(母さん、母さん、母さん助けて)

泣くからあの男をオトウサンと呼んだよ？

(ひろ、ひろ、ひろたすけて)

隣の家の子、皆から嫌われた子を愛したでしょ？

(コサカ、コサカ、コサカタステ)

いじめられた子、助けたじゃない！

『ねえ、俺、凜を助けたじゃない、なんでこんなことになるの!?!?』
嫌いな弟助けたのに。

(ねえ、神さま。これは、何の罰?)

『人間に戻してよ、こんなの違う、こんなのになりたかったわけじゃない』

愛サレテタ、水縁想良ニ戻シテ！！

「ソラさん？」

フィオ レが部屋の中に入って来る。

『寄るな、近寄るな。俺、あんたの猫じゃない！』

麗しい美人の飼い主も、巨乳のメイドも要らない。
欲しいのは水縁想良の自分。

「どうかしたの？ 高くて降りられないの？」

伸ばされる手も、甘い香りも要らない。

欲しいのはこんな世界じゃない。

『要らない、欲しくない！』

「誰かにいじめられたの？」

泣いているのに、涙が出ない。

ずっと、ずっと泣いてるのに、涙が出ない。

人間じゃない。人間じゃなくなったから、涙が出ない。

泣きそうな声でフィオレが言う。

泣いているのは想良なのに。

『じじは寂しいんだよ』

「大丈夫、私が居るわ」

俺は寂しい。

俺は寂しい。

俺は寂しい。

あの世界は好きなものだけ、素敵なものだけでできていた。

水縁想良は特別だった。

人を傷つけることが平然とできた、許された世界。甘美で甘露な世界。

「おいで」

愛して。

愛して。

愛して。

人間に帰ることが許されないなら、得られるだけの愛を求めても許されるでしょう？

(花の香りは優しい、いつも優しい)

いつもみたいにソラはフィオレの胸にもぐりこむ。

「私も悲しいわ」

『俺も寂しい』

鼻のキスに、キスで返す。

(ちゃんと愛したら、愛してくれる?)

現実を告げるのは悪いことではないけれど、
現実は痛い。
綺麗な部分だけじゃなくて汚い部分を含んでいるから痛い。

想良は痛みから目を逸らす。

わからないままなら、世界は醜くても痛くないから。

20・目の前の現実が答え（後書き）

子供は痛みを伴った現実が嫌い。想良はまだまだ子供。フィオレ
さんが一応、ヒロイン！！

21・怒る人（side：リュズギヤル）

正面から飛んできたナイフをひょいっとリュズギヤルはかわしながら、嗤う。

「よけんな、まじうざい。リュズギヤルしね」

「痛いのは嫌いなものでね、プロクス死ね」

「しねとかいうな！ リュズギヤルがアークアの手がかりを手ばなしたからいけないんだろ！」

一メートル半ほどの正方形の食卓の四席のうち、二席は埋まっっている。

リュズギヤルから見て正面に座る子供　の姿を装っているのがプロクス、火の神だ。子供の姿に似合いの幼稚な性格をしている。食べ方にも品がない。

（髪も顔も赤々と……これが神とは嗤えることだ）

対して、左側に座る土の神ラントは我関せずを貫いている。老人の姿をしているのが忌々しいことこの上ない。出された食事にも手を出すことなく、こちらの出方を窺っている。

（体の筋肉同様、頭まで筋肉でできているのだろつ。相変わらず、腹立たしい）

これが人間から二番目に優しいとされる神様、だ。

（黙って、閑せずにいるだけで優しいと思うから人間はアーグアを怒らせるのだ）

同じ四神であつても、あれと相容れることはない。

神としてリュズギヤルらが目覚めた時、アーグアは神だった。

名を与え、力を説明し、世界についてを淡々と語っていく。

一通り説明を終えると彼の人は言った。

「以上でこの世界の説明は終了とします。君たちは神として各々のすべきことをし、人と常にあってください。尚、私は基本的には水の中から世界を見ていますが、必要以上の干渉はしませんのでそれを念頭に置いて貴方方で問題には対応するようにしてください」

「最後に」と、どうでもいいように付け足す。

「君たちは不老ではありませんが、不死ではありません。人とは違いますが死にます。多少丈夫なだけです、履き違えないでください」

ぺこりと青い髪と目をした青年の姿をした神は頭を下げ、水の中へ消えた。

(自分は、首を切られても死ななくせによく言うものだ)

切ったらたぶん、自分たちは死ぬだろう。

アーグアは次元の違う、化物だった。あの時、確信した。

「リュズギヤル、態々呼び出したのだからそれ相応の理由があるの
だろう?」

「理由などない。模様のない猫はフィオーレ・ブルームという女に
譲渡した。神官長曰く、花だと言うのでな」

「うそだ！ 花はワタシが準備したあれだけだ！」

花。アーグアの愛した唯一。

アーグアは花を人に模した。花は美しい娘になった。

誰もが穢したいと思わずにはいられない純粹無垢な女にした。

(神の愛する者を奪って穢して、滅びたいとしか思えん)

リュズギヤルはどっちらでもいい。

人が滅びようがどうしようが。自分に被害がなければそれで構わな
いと思っている。

前回は、アーグアが人ごと、否、世界ごと全てを水に沈めようとし
たから止めただけにすぎない。

「どちらが花か比べればよい。それを人は望んでいるようだからな、

くふふ」

「勝手な言い草だな」

低い声。苛立つ声。

「勝手とは、な。貴様は優しい神なのだろう？ 人間が望むことを叶えて何が異論ある？ ああ、そうだったな、毎日毎日苛立ち地面を人が気づかぬほど少しずつ動かしている貴様なものな。人間などいつそ滅びると言いたいのか？ くははは」

だんっ、強い衝撃に食卓が割れ、上の料理が零れ落ちる。

「食べ物を粗末にするな、勿体ない」

零れた黒い液体。

味も何もない液体。

神の供物として造られた食べ物。

神の他は、猫だけが口にすることを赦された食べ物。

「世界には美味しいものが溢れている。しかし、我らはこれを食す。そう決まっているからだ」

土色の瞳、焰の瞳。

こちらを見るそれは人のそれとんなら遜色ない。

「口は話すためにある。物に当たるな、言いたいことがあるなら口にしろ」

「勝手なものは勝手だ」

一段としゃがれた声は低くなる。

「グローム王の寵姫だるうに、そんな女に手掛てかかりを渡すなどと」

「グローム？」

「はて」と首をかしげる。

「この国の王でしょ、リュズギヤルいいかげんすぎ！」

「どこでもいい、とにかくわたしは釘をさした。話はこれで終いだ」

花にでも何にでも干渉したいなら勝手にすればいい。

「ワタシは行く」

「好きにしる」

火柱が立ち、プロクスが消える。

「で、ラント貴様は何をする？」

いつも最後の最後まで手を出さない神は何をする？

「今はまだ様子見だ」

(口先すらない弱い神め……)

「ならば、消える。見えないところで高みの見物でもしているとい
い。世界が終わるまでな」

「……………」

土にラントは沈む。

焦げ跡に、土汚れ。食べ物の残骸。

「さて、わたしも消えるか……………」

部屋の変わりように嗟う。

神殿の者たちが苦勞するだろうが、所詮、人ごと。

21・怒る人（side・リユズギヤル）（後書き）

タイトルは「いかるひと」。アーグアの次に力のある神がリユズギヤル。

22・人間と猫、小さな世界

長い時間考えた。

フィオ レの柔らかくて温かい胸の中で想良は考えた。鼻を嚙りながら。

（人間じゃなくなったのもうしかたないと思う。メイドさんが俺のこと嫌いなものじゃない）

『結論、フィオ レさんにだけ干渉して、俺は小さな世界で生きる！』

傷つけるものなんて世界に入れなければいい。

人間の時そうしていたように、そうすればいいと 想良はそう結論付けた。

（メイドさんは俺のこと叩いたから、怪我させたことは帳消しにする。もう、関わんない）

猫らしく猫を被って、猫のフリ。

呼ばれたら『にゃあ』って鳴いて、用がないならフラッとどこかへ逃げればいい。

エクラの前では フィオ レの前以外はソラになる。猫のソラに。

「もう、ソラさん悲しくない？」

『一緒に居てくれませんか？』

(悲しいよ、寂しいよ。だから、ソラになる……嫌だけどわけわかんないことに悩むのヤダし。だけどさ、水縁想良を捨てられないから、フィオ レさんの前だけ想良のままでも許してよ)

『じゃあ』といつかのようになり、猫は白々しく鳴いた。

あの騒々しい子供は帰宅したようで、昼飯というよりも、夕飯に近い時間になってエクラはフィオ レたちを食卓に招いた。

「フィオ レ様、食事の時間ですので馬鹿猫は床に下ろしてください」

膝の上の想良をエクラが睨む。

ソラはわけがわからないというように首をかしげ、丸くなる。

「あら、どうでもいいでしょ？」

準備された魚料理をフィオ レはナイフとフォークで小さく切り分

けると、白い手にそれを乗せる。

「フィオ レ様っ!」

「ソラさんはシートスが嫌いなのだから、普通のご飯を食べさせてもいいと思うの。いつもいつもエクラは無理やり食べさせていたけれど、私そういうの良くないって思ってたもの」

しれっと言うフィオ レに耳を疑う。

なんだか、険悪だ。いつも穏やかな彼女の言葉の端々に棘がある。笑顔も声音も違わないのに。

「それと膝の上に乗せながら食事を行うことは別のことと存じます」
睨まれてもソラは空気を読まない。猫だから。以前のように降りない。

(『私も悲しいわ』)

あの時、フィオ レも泣きそうだったことを想良は思い出す。
自分のことではいっばいっばいだったので今の今まで忘れていたが。

(フィオ レさんもこの世界嫌なのか……)

何が理由かわからないが、エクラがその一端を担っているらしい。

「なら、食事をとらないわ。これでいいでしょうっ」

静かに置かれたナイフとフォーク。

「飢え死にを選ばなかったのは、気が狂って理性を保てなくなるのが嫌だっただけよ」

「今は関係なくなりましたから、どうでもいいんです、ふふふ」と笑いながら、想良を抱きかかえるとフィオ レは席を立とうとする。

「お待ちください、そのままでも良いので召し上がってください！」

「席を一度立つたら、戻るのはマナー違反よ」

らしくない様子のエクラに想良は目を伏せる。

(メイドさんは敵。フィオ レさんの敵は俺の敵)

言い聞かせるように心の中で繰り返す。

自分に向けられない感情がフィオ レには向けられている。

そのことに痛む胸。これは想良の感情だから、ソラは知らないフリをした。

『フィオ レさん、お腹すいたらシャルロットを捌いてあげるよ』

想良は『にゃあ』っとしか聞こえない声でフィオ レに言う。

「行きましょう」

微笑んだそれを了承とする。

(せめて、言葉がわかればなあ……)

フィオ レの悩みを軽くすることができると、思っただけに心が

痛くなつた。

23・人間と猫、小さな世界2

甘い香りの漂う部屋。

クリーム色を基調とした家具はもちろん、猫足。

(フィオ レさんの部屋にドキドキの初潜入です)

ぬいぐるみや人形と言った可愛らしいものはあちらの世界の同年代と違ってない。大きな本棚に、レコードプレイヤー。様々なアンティークが敷き詰められている。

(だが、それがむしろいい!! あっちのお部屋が寝室かなー、ワクワク)

「ソラさん私の勝手にご飯が食べられなくてごめんなさいね」

腕の中からそっと地面に想良を下す。

「シートスはないけど、お菓子なら置いてあるのよ? 口に合うといいのだけれど」

(なるほど、あの黒い謎の液体はシートスっていつのか。名前負けしてんなあ)

部屋の中央のテーブルにそそくさと歩いていくと、上に置かれた宝石箱のような綺麗な小箱を想良に向ける。中身は、チョコレートに

似ているものと、飴のようだ。

『あー、お気づかないなく』

「寝室のほうにも砂糖菓子があるからとっってくるわね」

先ほど見たドアとは真逆の方にあるドアへとフィオレは消える。
覗きこむと、ベッドが見えた。間違いなくあっちが寝室である。

(つーことは、あちらは浴槽でよろしいかつ!!)

尻尾が興奮に伴い揺れる。

エクラという邪魔者は居ない。今ここにはフィオレと想良だけだ。

(俺は猫ー、猫は一緒にお風呂だってなんだってオツケー。人間の心を持つてるけど、許される!)

妄想ー。一緒にお風呂。

「きゃー、ソラさんったら、暴れちゃだめよ?」

(げふん、げふ。いい、何これ。フラグ? フラグ!?)

妄想二。一緒に就寝。

「おやすみ、ちゅっ」

(ちゅって、ちゅって!! ああああああああああああああああ
あああ!!)
)

大量に尻尾を振っております。

ちぎれそうなくらい揺れてます。妄想によって。

「ふふふ、お菓子がそんなに嬉しいの?」

『今後の展開が!!』

追加された砂糖菓子は金平糖に似ているのから、アメリカでみたことのあるような丸い形のものまで様々な見た目のものだった。

『ジェリービーンズ』

豆の形をしたそれをジッと見つめる。

柔らかいのか堅いのか、遠目ではわからなかった。

(無駄に、向こうと似かよんっての)

日本のお菓子よりも丸みを帯びたそれは、アメリカのものに良く似ていた。

「Benice to people I'm sure people loves you」人に優しくしなさい、きっとお前を愛してくれる」

頭を撫でる手は大きく、堅い。皺くちやの手は温かった。

「Can't be true」ありえないよ」

菓子を頬張る子供はあざ笑うように返す。

食べてもないのに、あの時に食べたバブルガムの味がしてきた。

（最悪……）

「ソラさんはこれが気に入ったの？ んー、これ猫でも食べれるのかしら？」

ジェリービーンズを一粒掴んだフィオレは食べさせることができているのか悩んでいる。

（俺、猫だしね）

いらないとばかりに、チョコレートの箱に鼻を近づける。

(気分がそがれちった)

尻尾も床でしょんぼりとしている。

(「Even if you love Nobody love
someone」)

老人は目を細めた。

あまりにも悲しそうだったから、自分の世界を作ることにした。
愛したら、愛してくれる小さな世界を。

23・人間と猫、小さな世界2（後書き）

Even if you love, Nobody loves

meは、「愛しても、誰からも愛されない」みたいな意味です。なんか、本当によくわからんくなってきたw子供は些細なことで歪みながら大人になるんだぜ！

24・人間と猫、小さな世界3

『うます、うます』

口にチョコもどきがつくのも構わず頬張る。

日本のものに比べると粘着性があり、海外製のものに比べると甘みがない。見た目は固そうに見えて、生チョコのように柔らかい。

(へんてこなチョコ、うます。もぐもぐ)

「顔が汚れてるわ、ソラさん。あとで洗わないとよ?」

『あいあい』

優しい手つきで彼女は撫でる。

(フィオ レさんはやっぱし、笑ってるがいいよ。うん)

エクラにしていたような顔もフィオ レの一面に違いはないが、あの顔を見ると心が痛んだ。

(痛むのは嫌いだしー)

ずっと前に捨てた感情。哀は捨てた。

コン、コン。

軽いノック音。

足音も気配もしないのに、音だけが響く。

(ほ、ほらー?)

不安げにフィオ レを仰ぎ見れば彼女は眉間に小さな皺を寄せていた。

「開いてます」

「失礼します」

優しい声音だった。

扉が開くと、フィオ レとは少し違う甘い香りがした。

薄茶色の髪の毛の女が立っていた。顔立ちは長すぎる前髪によって判別できないが、すらっとした立ち姿は細いというより引き締まって見える。

(むむむ、もしかやこれがあの黒い謎の液体……シートス? シットン? なんだっけ? ……あ、あれを作った料理人に違いない!!)

猫らしく『ウーッ』と唸る。

「大丈夫、何もしません。フィオレ様、まず猫様を洗いたいと思います。がよろしいでしょうか？」

「……あ、あの」

「なんででしょうか？」

「いいえ、なんでもありません。お願いします」

(お願いされちったよ！ 一緒にお風呂はどうした!?)

うるうる悲しげに二人を見つめてみる。

『洗わないでー、お願いー』

「綺麗にしましょね」

女の唇が上に上がる。

どうやら、メイドさん二号とお風呂ファイト始まりのようです。

元祖メイドさんとは違いチョコまみれの俺を抱っこしてくれました。胸は薄かったです。フィオレさんよりも薄かったです。

25・人間と猫、小さな世界4

メイドさん二号とのお風呂バトル　なかつた。
生温いお湯で恥ずかしくなるほど丁寧に洗われただけだった。

『それまでにはいいとしても、洗ったら外に出すとかー皆鬼畜う』

猫の手では開けることのできない重厚感のある扉の外から吠える。

（今頃、中ではフィオ　レさんがふふふなことに！！　だああああ
っ、入りたい！）

スキアーにもまさか、性別差別を受けることになるとは思ってなかつた
想像良だった。

（絶対に覗く！）

やましい下心もあるが、フィオ　レをスキアーと一緒にしたくない
という気遣いもその中には含まれている。どちらが大きいかはあえて
言わないでおく。

(問題はどこから戻るかだけど……うーん)

扉には入れそうなどころはないが、部屋を見渡した限りでは出入り口はここだけ。

(つまり、一端外に出て窓から覗くしかない)

尻尾をくるんと廻して、開いている部屋を目指す。

三階を見た限りだと開いているのは端の部屋だけだった。様々な荷物と更に上に続く小さな階段があることから物置部屋として使われているようだ。

『ベランダは出れるっかなー』

早く部屋への通路を見つけないと、フィオレの入浴が終わってしまふ。

薄らと埃を被った窓枠を押す。案の定、鍵がかかっていた。

『下に一個か、これはいいとしてもどうやって窓持ち上げよう』

かんぬきのように棒を一本通してあるだけの錠なので、こちらは爪で頑張ればいけるだろう。問題は窓を押し上げるような力が想像にないことだ。

しかも、外を覗いても十センチほどの縁があるだけでベランダのようなものはないし、大きな木が邪魔で道を塞がれている。

(ちょっとやつかい？ 一応、上も見てみますかね)

上に行く階段を上る。

こちらにも似たような窓の造りだ。唯一違うのは、この部屋には天窓があるぐらいだ。

『いけそうになーい、ない』

(女の人が長湯って言っても、もう上がっちゃったかな。えー、どうしよう。いつそのこと、外に出て木登る?)

似たような気が確か、フィオレの部屋からも見えていたはずだ。

『うっし、外、外』

意気込んで尻尾をぶんと振った。

二階までそろりと下りて、エクラが居ないことを確認する。
この階にはシャルロットが外に出るための小さな押し戸がある、う
まくすればあそこから出られるはずだ。

(んふふー、今行くからねー)

『なんてこつたい』

押し戸の外には一メートルくらいの踊り場があった。
それ以外は何もなかった。

(見渡しよくて泣けるんですけど)

空を飛ぶために見晴らしがよくなっているのだろうけれど、ここか
らにはフィオレの部屋には行けそうにない。
この階にも同じように十センチほどの縁がある。行くならば、こ
れを伝って木がある場所まで行くしかなさそうだ。

『男はやる時はやるんだぜ』

小さな足で小さな踏み場を歩く。

26・痛み

必死こいて想良は縁を歩き、木の枝も飛び渡った。部屋のカーテンはほとんど閉まっていたので、もう一度木から縁に落ちそうになりながらも飛び移った。足を宙ぶらりにさせながら、縁に上る姿はさぞ滑稽だったことだろう。

カーテンから覗き見た光景に、そのまま落ちて死にたくなった。

(フィオレ……さん?)

丁度湯殿から上がったのだろう、タオルで体を彼女は拭かれていた。華奢な体つき、白い四肢。

不似合いな醜い傷跡。

背中に一文字に走るそれは醜い以外の言葉がなかった。

初日に見たのに似ている白いネグリジェに彼女は腕を通す。寝るための服だというのに、首元まできっちりとその服もいつものように覆われている。

唐突に、理解した。

浮き上がった薄桃色の肉筋を彼女は隠すために首元までの服を着ているのだと。

(こ、ここにいちやイカン！)

エクラの腕に傷を付けた時のように走って逃げる。
足が軽くなる風に体が溶けたみたいに早くなる。

来た道をひたすらに走って逃げる。

布団の中で震える。

耳を押さえて、尻尾を丸めて。

(俺は悪くない、悪くない)

覗きは犯罪だということは百も承知でやった。理由　やりたかったから。

愛そうと決めました。

愛してくれるならと思いました。

覚悟も何も足らなかった。逃げ場が欲しかった。

痛みはすぐに忘れる。

嘘、忘れたふりをしているだけ。見ない、知らない、傷はない。全部、嘘。

（メイドさんは辛そうな顔なんて、しない。嫌そうな顔しかしない）
フィオ　レに何か言いたそうだったのは嘘。

（フィオ　レさんがメイドさんたちに向ける視線が痛かったなんて、嘘）

彼女は笑顔だけが似合う。

全部、嘘。

見たいものだけ、ずっと俺は見てる。

(もう、ここやだ)

人の痛みは知らない、わかんない、知りたくない。
俺の方が痛いよ、助けてよ、ねえ、助けてよ。

(「Don't love me」俺のことなんてどうでもいいんだ)
だ(」)

皆、俺のことなんてどうでもいい。
俺もどうでもいい。
それでよかったのについていうのも、全部ウソ。

現実の痛みから逃げたかっただけ。

見ざる。

言わざる。

聞かざる。

世界は綺麗。

閑話：友達（side：ヒロ）

「生きてて、ごめんなさい」

そう言った子供をおれは殴りたかった。

「じゃあ死ぬか？」と、殺したかった。

しなかったのは単に、想良がせつかく守ったものだったからだだった。

前島広人が、おれの名前。「ヒロ」って想良からは呼ばれていた。

あだなだと思えばそれでいいのだろうけれど、想良は人の名前をいい加減にしか覚えないうつだった。

十時はきつと此方つてのを間違えられたまま「小坂」って呼ばれているんだろう。

訂正すればいいかと思うだろうけれど、想良は訂正を「わかった」って聞いたフリしかしない。

酷く適当で、残酷なことも平気でする無神経な性格で、いいところなんて皆無に近かったけれど、普通とはどこか違ったカリスマ性みたいなもんがあった。

でも、ほんとのところそんなことはどうでもよかつたんだ。
やつはおれにとって初めてできた友達だったから。

想良と会ったのはおれが十歳の夏だ。隣に水縁一家が引っ越して来たのだ。

おれは同じ年の子供よりもずばぬけて体格が良かった。
遊ぼうとするといつも誰かを怪我させて友達がいなかった（同じような体格の歳上の子も怪我させた）。

だから、遊び相手になってくれるだろうかとすごく期待して会いに行った。

青い目をした子供は、日本語を一切喋らなかつた。

おばさん曰く「日本語はわかるから一緒に遊んであげて」って言われて、遊び相手が欲しかつたおれは素直に頷いた。

確かに、想良は日本語がわかるようだった。決して、喋る時は英語でしか喋らなかつたけれど。

「何して遊ぶ？」

と聞けば。

「Whatever you take（なんでもいいよ）」

と答える。

「何ってるか、わかんねえ」

と言えよ。

「…………チツ…………」

と舌打ちする。

今は随分と明るくなって…………無神経さが顕著になったが、昔は人に絡むのさえ嫌っていた、どこか捻くれた子供だった。

よく「優しさ」が足りないって言われていた俺だけど、こいつに逃げられたらもう友達作りもできそうになくなるし、怪我だけはさせないようになろうと優しくした。

理想が日本語を初めて喋ってくれたのは「学校でも日本語を喋らないけど、広人くんの前では喋ってる？」とおばさんに相談されて「なんで日本語喋んねえの？」って聞いた時だった。

わけのわからん長い英語を言われた。もちろん、理解できなかった。

「そうか、お前も大変なんだな」

って、適当に言った。

「……わからないのに、返事すんなし、うぜ」

初めての会話である。

「やっぱ、お前日本語喋れるじゃん」

と、笑つたら。

「はー？ 意味わからんし、喋れるに決まってんじゃん。俺、日本人嫌いだから喋らないだけ。グランマのために覚えた日本語をなんで、知らん奴に使うのか理解不能」

と、まくし立てられた。

「もう、日本語喋んねえの？」

と、尋ねたら。

「……考えとく」

と、だけ子供はそっぽ向いた。

翌日から想良は日本語を使うようになった。

「友達になつてやる、お前馬鹿だから日本語しかわからないだろうから日本語で喋ってやんよ」と、威張って言うので殴った。

「痛い」ってローキックされた。

喧嘩した、友達になった。

あとで聞いた話。

想良は友達になる前からずっと言われたらしい。「前島広人は乱暴者だ」とか、「怪我させられる」とか、いろいろ。

それらをやつは鼻で笑う「で？」って。

仮に前島広人つてのがおれだってわかってなくても、おれのために日本語で喋るようになったことが嬉しかった。

友達でいてくれたことが嬉しかった。

ずるずると悪いほうへいっても一緒に今でも遊んでくれた。

(お前に想良の代わりに生きる権利なんてないのにつ！)

あとから聞いた話。

あの時なんてまくし立てたかは家族について愚痴ったらしい。

弟のことを好きかと聞けば想良は答える。

「嫌いじゃないけどムカックー」

って、笑う。

青い目は閉じられたまま、開くことはもうない。
似てない子供を睨みながら、おれはただ血がにじむほど拳を握る。

閑話・友達 (side・ヒロ) (後書き)

子供はさびしがり屋。次から、三部！

27・朝は遠い(前書き)

途中で間違っ
て消したorz

27・朝は遠い

メリーは黄色いカナリアを飼っている。

彼女は唄を聞くのが好き。

駕籠にしがみついて、唄を聞くのが好き。

だけど、みんな羊のことしか知らない。

羊はメリーが好きだから。メリーも羊が好きだから。

カナリアが唄を忘れたならば、きっと彼女は捨てるだろう。

愛しているよと、カナリアが嘆いても。

) Don't come near me (

愛してないなら、なんで、傍に置くの？
どうせ、要らないんだろ？

) Leave me alone (

息苦しい。いきぐるしい。イキグルシイ。

父親なんていない。

弟なんていない。

全部いない。

ちゃんと口にしたのに、誰も聞いてくれない。

I I I I I
l l l l l
o o o o o
v v v v v
e e e e e
y y y y y
o o o o o
u u u u u
.

愛してたら愛してくれるなんて嘘ばかり。

They don't like me .
They don't like me .

愛した分だけ、嫌われる。

知っていたよ。知らないふりをしてただけ。

誰からも愛されないことなんて、愛されてないことなんて知ってたよ。
ずっと前から愛されてなかった。

もう、誰も愛せない。

痛みを知る人間はきつと俺がするよつに平気で、俺を捨てるから。

もう、誰も愛さない。

布団の中で丸くなる。

今日から俺はソラ。ただのソラだ。

世界が痛みしなくて、それを忘れることが許されないなら捨てる
ことしかできない。

I
w
i
l
l
l
o
v
e
y
o
u
f
o
r
e
v
e
r
.

ソラの朝はまだ遠い。

27・朝は遠い(後書き)

次回こそ、三部! Don't come near meは「そばに
来ないで」。Leave me aloneは「そっとおいで」。
They don't like meは「彼らは俺のことが嫌い」。I
will love you foreverは「ずっと愛してやる」。

エクラがダイニングに食事の準備をしに入ると、猫が行儀良く座っていた。

どこかおかしいと首をかしげる。いつもの朝ならぐーすかと眠りかけている時間だったし、なにより近くにシャルロットが見受けられない。自主的にソラが起きるとは思えなかった。

「にゃー」

何の感情もない目だった。青い硝子玉を見ている気がした。

昨日見た感情が何一つ見つけられず、食い入るようにソラをしばらく見ていたが「にゃー」と鳴かれて目を逸らす。

（なんで目を逸らしたのだろうか？）

もう一度見ると、ペろペろと白い体を猫は舐めているところだった。

文句を言うことなく、猫はシートスを美味しくなさそうに食べた。それが終わると、ゆったりとした動作で部屋を出ていく。尻尾はぶらりと揺れていたがいつものような忙しなさは微塵もなかった。

(なんとなく、なんとなくだ)

自分に言い聞かせるように猫の後を追う。

猫はトコトコと階段を上っていく。三階へ続く階段に足を掛けようとしたので慌てて止める。

「コラ、上に行くな」

首根っこを掴んで持ち上げても不愉快そうに眉をしかめず、猫はこちらを訳がわからないというように見る。

「じゃー」

体をよじるようにして地面に降りると振り向くことなく猫は自分の部屋に向かう。

「ソラ」

名前を呼ぶ。

「じゃー」

止まって、猫は振り返る。

やはり青い目は無感情に輝いていた。

何も言わなかったので、猫はすたすたと歩き出す。

(なんなんだ一体……)

フィオ レといいソラといい、皆は何を考えているのだろう。
少し頭痛がした。

エクラは頭を押さえながら、仕事に戻った。

やはりおかしいと思ったのは昼餉の時だった。

猫はまた時間よりも早くにダイニング居た。上に、フィオ レが入
ってきて嬉しそうに尻尾を振らずに近寄って一鳴きしてからすり
寄った。

大はしゃぎして鳴くこともなければ、フィオ レに抱きしめられて
も胸にすり寄ることもない。

「今日のソラさんは大人しいのね」

「じゃー」

(なんだ、この生き物)

よくわからないがまた、頭が痛んだ。

29・何も考えない猫

朝誰に言われるまでもなく、食卓へと向かう。

猫のご飯を文句を言わずに食べる。

呼ばれれば返事をし、「やるな」と言われればやめる。

もちろん、フィオレの前でも猫になる。

必要以上に自分からは近づかず一定の距離をとる。そして、無駄な時間はベッドの中で眠る。

何も考えないのは意外と楽だった。

楽だけど酷く退屈だ。

部屋に入るなり溜め息を吐く。とぼとぼとベッドへ歩く。

(一生こうして、無駄な時間を生きるのか)

布団の上に寝転がって、胸一杯匂いを嗅ぐ。甘い香りだけに今は救いを感じた。

どうしてだかわからないが、救われる。

夕食までの時間何をして過ごせばいいのかわからないし、眠るのも

飽きた。

『シャルロットも居ないし、お外でも見つかね』

シャルロットを昨日の朝以来見ていない。

暇を潰す相手には多少うざいが持ってこいなのに。

(俺を一人にすつとか、ありえんし)

青々と茂る木々、空を飛ぶ小鳥らしき物体。

同じように見えるのに、異世界なんだと思いき知らされる。

『俺、どこへ帰ればいいんだろなー』

家に待っていてくれる人はいない。

それどころか、あっちの世界でも好かれていた気がまったくしない。

都合良く、生き過ぎた。

ここもずっと居たいとは思わない。

こっちの世界に想良も、ソラも必要とされていると思えない。

ありえる未来予想図としては、猫の嫁さんで見合い。結婚、ベイビ
ー。

(吐き気がするな、猫に欲情とかウケル)

最低な未来予想図だ。

ギョッと軋む音に視線を投げる。扉のところにはフィオレが居た。

『にゃー』

言葉に意味を込めずに鳴く。

「ソラさん、一緒にお庭を見ましょう？ お花がとっても綺麗なのよ」

近づいて、膝を折り、頭を撫でる。

服が汚れるのを構わないのは「もっとうでもいい」からなのだろうか。

(なら、構わないでくれたらいいのに……)

撫でる手が、棘のように刺さる。

庭は色とりどりの花で溢れていた。
バラに、チューリップ。パンジー。きつと、名前の違つのであろう
花。

「綺麗でしょ？」

『これに乗っていなければ』

現在、乳母車での移動中。

これはフィオレが成猫を持って、庭を歩きまわれるわけがないと
いうエクラの配慮によるものだ。
遠くに気配も感じるので、たぶん、見えないところから彼女は見張
っているに違いない。

(別に、もう、何もしねえよ)

空を見上げる。

綺麗な青空だ。雲もなくて、日差しがまぶしくて　海が見えれば
言うことがないと想良は思った。

(風の匂いが違うな、ここは)

空と海が綺麗で、日差しが眩しい場所に帰りたと思った。

「これは、ワイド。こっちはね……」

しきりに説明する彼女を見る。

『フィオレさん、日傘しないと肌やけどちゃうよ』

日差しの中で、くるくると回る白い傘。

(きっとあの傘が似合う)

そのピンク色のドレスにも。

「ふふふ、楽しい?」

『じゃー』

また音だけで鳴く。

自分の痛みで精いっぱいなんだ。

30・何も考えない猫2 (side:フィオレ)

庭園を見せながら、乳母車の中の想良を見る。

濁った眼。昨日は確かに、光が戻ったのを見たのに。

(本当に誰かにいじめられているのかしら……、それともここが嫌になったのかしら?)

ふいに猫は青い空を見つめて、鼻をひくひくとさせる。
懐かしげな眼差しが人を思わせた。

「これはねワイド。こっちはね……」

その様子がなんだか居心地悪くて、花の説明を始める。

(人のわけないのに……、いいえ、人であって欲しくもないのだわ)

想良は猫なのに、猫らしくない。

返事の仕方から言っても、こちらの会話を理解している節がある。

それは安堵を与えると同時に、怖い。

人の言葉を理解しているということは、人の善し悪しも知ると言うことだ。

(私も含め、人間なんてロクでもないもの)

アーグアが水に世界を沈めてくれていたらよかったなんて思うのは罰あたりなのだろうが、あの日以来思ってしまう。

それまでは確かに幸せに生きていたはずなのに、もうその頃の手が思い出せない。

「にゃー、なうーん」

「ふふふ、楽しい？」

「にゃー」

短い鳴き声に目を細める。

屈んで、頭を撫でる。

想良は戸惑ったように一瞬体を強張らせたが、ペロりと手を舐めてきた。

「花は素敵ね。ずっとソラさんとここでこうして居たいわ……」

「にゃー」

今朝から頭の片隅で考えていた。この幽閉生活も終わるかもしれない。

（猫を返しても何をして、もう遅いのに……馬鹿な人たち）

何一つ赦されなかったこの身を按じ、屋敷を父が与えてくれはしたがプリンデッルと同じくグローム王の元へ本来ならば嫁いで貰いたいはずだ。

意思を尊重して召し上げられることはなかったが、こうなった今は強引に召し上げられてしまいかもしれない。

（人の良心に驕った罰かしら？ 皆が傷のことを気にしていることを利用したせいだということなら、いっそのこと、傷が顔ならよかったわ）

顔なら、世を憐むフリして死ねただろう。彼らも執着することなかっただろう。

死を匂わせると必ずスキアーに邪魔される。

気がかりなのは、その彼女がなぜ猫を飼おうとした時に止めなかったかだ。

（彼女のことは五年いても何もわからなかったわ）

「にゃー」

「中に戻ってお茶にしましょうか。今日、新しく朝お菓子が届いたらしいのよ」

にっこりと笑う。

「にゃーにゃー」

嬉しそうに猫は鳴く。

だけど、昨日の様にお菓子を喜んでいる時とは声の質が違う気がする。

(どうしたら来た日みたいに戻れるのかしら?)

利用する代わりに愛すると、幸せにすると決めたのに。

「そうだわ、裏庭に行きましよう！ 裏庭はね、野生の花も綺麗なだけけど、実のなる果実が沢山あるの。こっちと違って、人の手があまり入っていないくて自然を感じられるのよ？ たぶん、今の時期ならエアトベールがまだなっているはず……」

乳母車の方向を裏庭に続く道へと向ける。

「なーう、なう」

「あら、ソラさんはお菓子の方がいいの？」

想良は乳母車の中で唸っている。

裏庭に行きたくないということなのだろうかとも思うが、返事はない。

「もしかして、私の心配をしてくれているの？」

「にゃー」

日差しが眩しいのを気にしてくれているのだろうか。

それとも、長時間外を出歩くことが不向きなことを気にして？

(やっぱり、人よりもずっといいわ)

「優しいのね。裏庭はお茶をしてからならいい？」

「じゃー」

鳴いた声に顔を弛める。

濁っていても、温かみのある態度に微笑んだ。

30・何も考えない猫2 (side:フィオレ) (後書き)

ワイドは薔薇。 エーアートベールは母。 次回のプロクスがそろそろや
って来る？

31・何も考えない猫3

）「ずっとソラさんとニコでじっとして居たいわ……」

）「もしかして、私の心配をしてくれているの？」

）「優しいのね」

頬張った菓子はまるで砂の様に味がしない。

）打算だっつもの

顔の周りを舐め、手で拭く。

案の定、外から戻ったフィオレは疲れたようでもロッキングチェアに深く身を沈めながら紅茶だけを飲んでいる。

(熱中症とか……。普通に考えたらわかんだろ、気温高えし、ここ) おくびにも出さず心の中だけで思う。

「ソラさん美味しい?」

『ぜんぜん』

可愛らしく声を高めで鳴く。

「そうよかった」

(俺のこととか理解しようとしなくていいっての……)

穏やかに微笑まれるほど、その笑顔が嫌いになる。自分だけへの優しさ　ソラへの優しさ。

(猫のソラだって割り切れなくなりそー)

段々心が重くなる。

(部屋に帰りたい。もう、布団かぶって寝たいし)

眠ることを考えたせいで、あくびが出た。

「眠いの?」

『じゃー』

猫語で頷く。本当はここに居たくないだけだけど。

(だから、うんな顔すんなつーの)

突き放せばすぐに悲しげな顔をする。

他の誰が同じことをしてもそんな顔をすることなどないくせに。

「おいで、部屋まで運んであげるわ」

優しい手、傷つける手。

『一人で行けっから平気よ、おやすみん』

温もりを避け、歩き出す。

「あ」

決して振りかえらない。猫だから。

(布団かたーい)

甘い匂いはフィオレを思いだすので、部屋に置かれたソファアのクッションの上で丸くなる。寝具のそれとは違いたいぶ堅い。

『シャルロットー、ひまーいー』

相変わらず居ない奴に怒りの矛先を向ける。

(退屈は猫をも殺す!!)

夕飯まで陽の傾きから二時間はある。

この暇な時間をなんとして潰すべきか、それが問題である。

『よし、死んだら次は鳥になる、俺は自由に飛ぶ!!--!』

鳥だって羽を休める木がなければ自由などないと、知っているけれど。

空を飛ぶ鳥は地に這うだけの存在からすれば自由に見える。

(今度、シャルロット見たら羽根に乗って空飛ぼう! 口じゃなく

て！)

窓の外をただ、見つめる。

(海の匂いのしないこんな場所など、雨に濡れてしまえばいいのに)

何も考えたくないのに、考えをやめることすら許されない。

(世界がすぎすぎる)

あざとく猫の口で笑う。

言葉がわからないことをいいことに、嘘ばかり吐く。

31・何も考えない猫3（後書き）

想良視点がやたらと面白くない。そして、ゲームしてたら投稿忘れてた。明日こそ、神出す！

32・自称神さま現る！

首根っこを掴まれて、また、眠ったのだと想良は知った。
どうやら、この体は暇があれば本人の眠気など関係なく眠りに就こうとするようである。

重たい瞼を持ち上げた先は赤に埋め尽くされていたので、エクラの赤い髪を頭に浮かべる。

(三日坊主ならぬ、三度坊主……)

『おはようございます、メイドさん』

「だれがメイドだ、しね」

…。

……。

……………。

ムカツク喋り方はどこぞの弟の様である。

苛立ちに想良は頭を覚醒させる。

『あーん？ てめえ、どこのどいつだこんやるめ』

ぱっちりと目を開けた先に居たのは、エクラと同じように赤い髪をしている子供だった。目も血の様に赤い女の子。昨日見た子供よりも小さく幼いが、眼差しは老成していて強く鋭い。

(げ、なんだこいつ、キモっ)

高く一本に結われた髪、フィオレたちとはまったく違う服装。

子供の服装を一言で言うならば派手 派手以外にない。アジア風の強い奇抜な色と模様が施されたチュニックとバルーンパンツ、細い腕には不似合いな金色の太い腕輪。

「猫のくせに態度でかい……ワタシはプロクス、火の神だ」

知っているだろうと言わんばかりの態度に鼻を鳴らす。

『プロなんとかとか、知らんし。とっとと降ろせ』

近くにある顔に爪を掛ける。

エクラならば手の届く範囲に顔がないが、対格差もあってプロクスの顔はすぐそこだった。

「いたっ！」

くるっと円を描いて、下りる。

かなりの力を込めて引っ掻いたはずだが、子供の顔には赤い筋(といっても、傷ではなく痣)が薄らとしか浮かんでいない。

『か、ったああああっ！』

(引っ掻いたほうが痛いとかなんなの!?)

爪が折れてないか慌てて確認をすると、爪とぎで研いだばかりのように先の方が削れていた。

(まじ、キケン)

こんな奇天烈な存在がここに居ることが想良には理解できなかったが、自分が逃げることの優先順位が最上位だということは理解できた。人間としてか、猫としてか いずれかの本能がヤツに関わるなど言っている。

しかし、ここで自分が逃げたとしてフィオ レたちは一体どうなっているのだろうか、どうなるのだろうか。

仮にも神だと言っている人間(?)だ。易々と助けを乞うことはできないだろうし、彼女らに危険が及ぶのは本意以外の何物でもない。

慰めにもならないが、距離を取りながら低く唸る。

(一宿一飯の恩義とか、日本人率四分の三にも適応されんのかねえ?)

すでに痕すらない子供を見ながら、溜息を吐く。

こっちの装備、爪と牙。

爪はすでに役に立たないことが検証されているので牙も大差はないだろう。

相手の装備、鈍。

この柔らかかふにふにボディはさっくりと当たった瞬間、天国行き確定。

(どう考えても、勝ち目ねーえし)

「 やっぱり、ただの猫のくせに生意気、ほんとしね! 」

さっきの一撃で相手を怒らせたようだし、鳥になるのも時間の問題かもしれない。

「 ぐげええええええええええっ 」

まったく必要としてない時に限ってシャルロットは現れるし、本当にどうしようかと想良は頭を抱えた。

『 頼むから、お前空気読めよ! 』

悩んでいる間に、敵に突っ込んでいこうとするそれをとりあえず止める。

(いやー、絶体絶命?)

前には敵。

後ろには役立たず。

(なんか、虎や狼の方が逃げられる気がする……あー、めっちゃメ
イドさん二号に会いたい)

もちろん、戦闘要員としての希望である。

あの人だけはこの現状をなんとかしてくれそうな気がした。

33・自称神さま現る！2

(奴はチートだし、ドジロットのせいで、逃げるに逃げれなくなっ
たし……ほんとどうしようかなー)

腰の鉈に手を掛けて、殺気をムンムンと放っている。

自称神さまは一メートルにも満たないちびっ子だが現在想良は仁王
立ちしてもその半分以下、体が小さくなったせいで恐怖だけが溢れ
て来る。

「時間がないから聞く、す直に答えて。アーグア知ってる？」

(アーグア?)

想良に心当たりはない。即座に答えようとして、どもる。

(てか、このちびっ子こっちの言葉わかってるんじゃない?)

言葉のキャッチボールが成立しているし、何よりこちらに質問して
きているのがその証拠だ。

『何、お前俺の言葉わかるわけ?』

「だったらなに? 質問にこたえて」

(チートとかありえんし)

「早くしないと燃やす」

質問の答えに満足のないかたを返せば何されるのではないかと
も思うが、このまま殺されるよりはマシだと判断し答える。

『知らない。アーグアって何？』

疑わしげにこちらを見ているが、知らないものは知らないので答
えようがない。

暫くすると「知らないならもういい」子供は炎に包まれた。

一瞬の業火、赤い絨毯に三十センチほどの焦げを残しそこには誰も
居ない。

(臭いがしない……)

そろそろと焦げた地面に近寄る。

ちよんちよんと触ってみても熱さはない。眠っていたソファの近く
にももうひとつ焦げ跡があったのでそちらにも近づく。

やはりこちらからも臭いはしなかった。

『化物すぎだろ』

驚きに固まっているシャルロットを尻尾で攻撃して、起こす。

『お前ちゃんと証言しろよ、俺がやったんじゃないやねえって』

どちらのメイドが見てもこれを想良がやったと判断し、怒りかねない。上に、わけのわからない疑問まで残していかれた。

(アーグア)

ピンとも来ない聞き慣れない名前だ。

それをなぜ想良が知っていると思ったのか。それに関係があると思っただのか。

また、それがなんなのかも疑問だ。人なのか物なのか、あるいは神か。おなじ

『こちらら異世界の猫デビュー五日目だっつ』

「ぐええげ？」

わけがわからないと言つように鳴く鳥に「気にするな」と肉球でタッチ(反省のポーズではない)。とにかく、こちらには因縁を付けられる覚えなどない。

(よし、フィオレさんの様子確認しに行こう。あの様子じゃ他のところ行ってなさげだけど、確認しとかないと落ち着かんし)

精神的に落ち込む上に、チート過ぎる外敵までいるとはどれだけこ

の世界は厳しいのだろう。かと、嗤う。

『鳥になったがよかったかも』

自分が呼ばれたと思ったのか、嬉しそうにシャルロットは口をがばつと開けてこちらを見る。

『はいらねーよ』

背中に乗って空を飛びたいとも思ったけれど、ぬめりすぎて落ちるだろうと飛ぶのも諦める。

(金持ちは平和と遠い……)

シャルロットを引き連れて食卓へ向かう。
時間的に、二人は居るだろう。

34・自称神さま現る！3

部屋を出てようとして、エクラに捕まったのは想良にとっては不意の出来事だった。

なので首を掴まれたのに対し、独り言ちってしまった。

『ちょ、メイドさん来るの遅いから！ いや、今だと早い……？』

「あ」と言う声と同時に、部屋の中の跡がばれたことに項垂れる。

(俺じゃないんだけど……)

エクラにも言葉が通じればいいと心底思った。

「これはなんだ、馬鹿猫」

『違っつて、俺じゃないって変な自称神さまがやったの！』

今回ばかりは悪いことをひとつもしてないので、怯むことなく叫ぶ。言葉が通じなくても、とにかく訴える。

『シャルロット、言ってやって、俺じゃないって』

「さあ」と促すとシャルロットはバタバタと羽根を振った後、想良を指した。

「ぐげえ！」

『それじゃ、俺犯人！！』

肉球のついた手で頭を抱える。

(えー、マジ使えない。何コイツうー)

シャルロットの使えなさに涙が出て来る。居てほしい時は居ないし、助けてほしい時はピンチに陥れてくる。

(俺、絶対こいつと相性悪い……)

「一体どうやってこんなことをしたんだ、まったく」

『ホントに無実なんだってばあー』

ブツブツと怒るエクラ。

怒る姿は嫌いだと思っていたがしょげている姿よりは好ましく思えて、嗤う。

食卓で既に席についていたフィオレはエクラから事の顛末を聞か

されて、目が零れ落ちそんなほど驚いていた（家が燃やされて驚かないわけもないけれど）。

「ソラさんがやったの？」

『やってない』

首をブルブル振る。

「誰がやったかはこの際置いておきましょう。家の中には誰かが入って来た様子はないようですが……万が一のことを考えフィオレ様、当分の間はお部屋から出ないようにお願い申し上げます」

「裏庭にこの後、ソラさんと行く予定なのだけれど」

「やめていただきます、御身のためです」

フィオレが大きな溜息を吐く。わざと吐いたのだ。

「大事にする身でもないのですけれど……ね。食欲が失せたので、下げてください」

席から立ち上がると彼女は、扉へと歩く。

（えー、食べないの？）

料理は運ばれてすら来ていない。昼間は食べた姿を見たが、朝はわからない。

細い体が一日一食では更に細くなってしまっではないか。

「あ、そうだ。部屋から出ない代わりにソラさんを部屋に居れてもかまわないわよね？」

「……」自由」

「よかったわ」

にっこりと差し出された手に想良は、重たい足取りで向かう。

さっき逃げ出した手前腕の中は、居心地が悪かった。

でも、逃げ出さなければ一緒に裏庭に行けただろうし、家の中に焦げ跡を二つ作ることもなかったわけだと思つと非がこちらにあるような気もする。

(けどさ、俺が家の中に居たからこそ二人に被害がなかったわけ……)

『じやー』

逃げ出したいと思つて、意味もなく鳴く。
音が溜め息の様に聞こえた。

35・家出？

カチャリ。

(さて問題です、今の音何の音でしょうか　正解はフィオレさんが自室に鍵おかけた音です！)

先ほどとは違った意味で汗が流れる。

「さ、準備しましょうね」

ニツコリとした微笑みの裏に黒い何かが見えた。

(きつと気のせい、フィオレさんは心が真つ白な妖精だもの)

現実から目を逸らす。

五分経過。

慌ただしくフィオレは未だに部屋の中を動き回っている。

(この部屋のどこにこんなロープ置いてたんだろっ)

持って来られたものはベッドの上に無造作に置かれている。

(ロープ、バッグ。皮手袋に、ズボンは乗馬とかに使うやつに似てるけど……てか、コレって外出る気満々じゃね?)

ニコニコと笑いながら準備するその姿からは悪意は感じられないが
する気なのだろう。

これも、見なかったことにする。

一通り準備し終えたのか満足そうに頷き、ロープ以外をその中に詰めていく。

『え、ここはお着替えじゃないの？ 動きやすい格好で逃げるんじゃないの?』

「あら、ソラさん何かしら？ 私忘れ物でもしたかしら？」

首を振って一言鳴く。

(一度、会話が通じただけに複雑……)

自称神さまとは言え、人型をしたプロクスと言葉が通じたために他の人でも通じるのではないか。通じれば良いのにと思わずにはいられなかった。

(ま、向こう化物だし)

「さ、準備もできたしやりましょうか？ 絶対、騒いじゃ駄目よ」

鼻を白い手が小突く。

『何する気なのー？』

奇行はまだまだ続く。彼女はバッグをベッドの下に隠したかと思えば、ベッドの脚に紐を括りつけ窓の下へとそれを投げる。

「あとは待つだけよ」

『なるほどね、隠れるわけね』

エクラが探しに来て、これを見て外へ探しに出た隙に行く計画なのだろう。

(「こんなのに引つかかるかねえー」)

「し、静かに」

そう、言われて猫は無言のまま頷く。

暫くして、エクラが扉を壊して入り、この陳腐な仕掛けを見て慌てて出て行ったのをにっこりとまた笑うフィオ。レの姿に必死に想良は「優しい妖精さん」と自己暗示を掛けた。

36・待ち伏せ(said:プロクス)

目の前の光景に、リュズギヤルの笑い顔に、プロクスは眉間に皺が寄るのを感じた。

「で、猫はどうだった？ 間近でみたのだろうか？ わたしは見ていないのでは」

「なんで、リュズギヤルがワタシの神殿にいるっ!?!」

「もちろん、好奇心だが？」

プロクスは苛立たしい気持ちでいっぱいになった。

(なんでこいつがここに!?!)

押し殺した怒りがまた再熱する。

猫は期待はずれもいいところであった上に、喧嘩まで売って来た。一応、不法侵入している身なので殺すことはしなかったがおかげで怒りの行き場がなくなった。

それなのに、住処に帰ると会いたくもない人物がいるではないか。苛立ちが増さないわけがない。

忌々しいことに、しかもひとの椅子に座って寛いでいる。

(こんなやつに教えたくない……)

「そう言えば、言っていた花を見たが、酷い臭いだ。あれが、本当に花なのか？」

「花だ!!」

アーグアへの貢物として準備した女も勝手に見たようだ。

(うちの神殿のやつらはなにしてる！ 全員、みな殺す)

きつと良いように言いくるめられたか、神であることでごり押しでもしたのだろう。

相変わらず良過ぎる性格をしている。

「まあ、花は良さ。猫だよ、猫。アーグアに何か関係があったかどうか重要だ」

(自分から話をそらしたくせに)

軽く舌打ちしてから、地面に座り込む。

プロクスは短気だが無謀ではない。リュズギアルに喧嘩を売っても勝算の見込みが少ないのは理解しているので、大人しく語り出した。

「アーグアのことは知らないと言っていた。見た感じはただの白い猫だったけど、……ワタシに爪を立ててきた」

「猫がわたしたちを恐れないだなんて、くは」

この世界に生きるものたちは大小問わず、神である自分たちに畏怖を抱かずにはいられない。

人ではないと、猫ではないと。我々が神なのだと格差を付けるために、体から感情の一部が流れだすのだとかつてプロクスたちはアーグアに教えられた。

「そうか、猫が……」

人と言った危機感の薄い種族はあまり畏怖を抱かないようで、今も昔もどこか神を軽視している節がある。それに比べて、動物は危機感が強く決して自分たちに逆らうようなことはしない。むしろ、恐れですぐにどこかへ逃げ隠れる。

「怯えてたようだったか？」

「逃げたそうにしてたけど、びみょう」

「益々面白い、くふふ」

(ちつともおもしろくない)

あの猫は異常だ。神に爪を立てようとするなんて普通はありえない。

「話はそれだけなら、かえれば？」

「いや、フィオーレ・ブルームの家に見張りを付けると言いに来た」

「は？」

(みはり?)

リュズギヤルのすることは、訳がわからないことばかりだ。

「干しようするの？」

「花かどうか、確かめる必要がある。話を聞いて駒を増やすかどうかを今日は決めようと思ったただけだ」

「そ、好きにすれば」

「するに決まっている」

にいつと口角が上がる。

不気味なほど美しい笑み、人はこれを見ると呆けるらしいがプロクスには恐怖しか浮かばない。

「いつでも動けるようにしておけ、それと花もな。もうそろそろアーグアが動き出す気がする」

「わかった」

「良い返事だ」

一陣の風が部屋の中に巻き起こる。リュズギヤルがようやく帰ったようだ。

(どいつもこいつも、ほんとむかつく！)

そういえば、他にも齒向かってきた鳥がいたなと思ったが。すぐに怒りでそれは心の水底に沈んだ。

この日、一つ火山が噴火した。

被害は通例通り大きくなかったものの暫く納まらなかった。

37・甘い悪戯(s i d e : フイオ レ)

出るなど言っ出て出ないのは昨日までの私だとフイオ レは部屋に入るなり、にこやかに笑う。

フイオ レの計画はこうだ。

窓から下りたように見せかけて、エクラが慌てて出て行った頃に普通に正面から外に出る。続いて、真っ先に裏庭を彼女が探すと思われるので入れ違いに裏庭に入る。

(スキアーにならこんな作戦通じないだろうけれど……)

今のエクラは動揺しすぎている。騎士として如何なものかと思うほどに。

(私情を忘れて自分の仕事だけしていればきっと彼女も一流と呼ばれたのでしょうけどね)

所詮は仮定の話に過ぎない。

彼女は私情をなくせないし、今後もそうだろう。

(どうせ賊が居てもスキアーが片付けてしまうに違いないもの)

そして、自分が居ても居なくても関係ないということを学ばない限り決して変われないだろう。

「さ、準備しましょうね」

そう言って、声を掛けると想良が引きつったように笑った気がした。

上手くいきすぎように思われたがつつい笑ってしまう。予想外と
言えば部屋の鍵を壊されてしまったことぐらいだ。スペアキーで開
けるだろうと思ったのに。

(今は時間が惜しいし、気にするのはやめましょう)

「ソラさん、行きましょうね。静かにしてね？」

「じゃー」

素直な返事に「いい子ね」と頭を撫でる。

静かに階段を下りて、裏庭を目指した。

裏庭へ行くための小道を進んでいくと、大声で自分の名を呼ぶ声が聞こえてきたので茂みに身を隠し息を殺す。

「ファイオーレ様あー！　ファイオーレ様ー！！」

どンドン声は遠のいていくようだったが、張り上げる声は反対に大きくなるようだった。

(この調子だと、正面をそのまま抜けて正門のほうへ行くわね。もっと声が小さくなってから出しましょう)

「じゃー」

腕の中の温もりがもぞりと動く。

「まだ騒いでは駄目」

抱きしめて落ち付けさせようとするが、想良は落ち着かない。

「お願い静かにして……」

どうしても、裏庭に今日行きたいわけじゃない。行けないわけじゃない。

だけれど、このままだとどうなるかわからない不安が胸の中で大きくなった。

賊が居るなら殺されたいと思っているのかもしれない。

(殺されたほうが楽になれると思っているだけだわ……)

心の奥底にある疑問。

壊れたのになぜ死を望んではいけないのか。

いつまで生きる屍でいればいいのか。

生きる意味などありはしないのに、生かされることの疑問。

段々と動きが想良の動きが小さくなる。

(ありがとう、ソラさん)

心の想いを伝えるために、額に軽く口付ける。

私はこの後、裏庭で起きることをまだ知らないでいた。

知っていれば引き返したかもしれないけれど、やはりそこに居た気もする。

エアトベールを摘んでいると、遠くから懐かしい声が聞こえた。できることならば一生聴きたくなかったその声に、身が凍る。

想良が唸る。

唸った方向には、闇がこぼれたような深い黒髪の男がそこに居た。

「へい、か……」

灰色の目をした美しい男はまっすぐにこっちへと進んで来る。この国の王オーディオ・グロームがすぐ傍に居た。

37・甘い悪戯(s i d e : フ イ オ レ) (後書き)

敵がやってまいりました。

エクラの声に反応して、想良はフィオレの居場所を伝えようとした。

『メイドさん』

なぜ、そんなことをするのかと理由を問われれば外が危険だからだ。想良もフィオレ同様にこんな陳腐な作戦が上手くいくと思っていなかったのだ。行けたとしても玄関まででスキアーがエクラのいずれかに連れ戻されると思っていたのだ。

（メイドさんだったらちゃんと仕事しろよな、もー）

プロクスのような危険な存在が外には居るかもしれない。そんなものと対峙したら自分は役に立てない。

声が遠のいたので、もう一度鳴くために口を開ける。

「まだ騒いでは駄目」

優しい力に想良は閉じる。

「お願い静かにして……」

耳にすんと落ちる声。震えを帯びた声。

（もしかして、俺また自分勝手？）

フィオ レのたれを思ってエクラを呼ぼうとした。だれど、それで泣かせたいわけじゃない。

ちゃんと相手のことを思ってそうしようとした。

猫の体は言葉が通じないし、非力だ。

（呼んだ方がいに決まってる……）

自分よりエクラのほうがフィオ レの役に立てることが理解できないわけじゃない。していたからこそエクラを呼ぼうとしたのだ。

エクラよりフィオ レを優先すること選んだ。自分で。

『俺が何かするところくなことない。普通に、素直に呼べば良かったっていう、ね』

泣かせたくないとか、そういうのは自分が考えることじゃないと想良はつくづく思った。

裏庭に入って少しして感じたことのない気配がしたので、フィオレの前に立って唸る。黒い闇の中から男が現れた。

「フィオレ」

低音の声が優しくフィオレの名前を呼ぶ。一步、彼女は後ろへ下がり固まる。

「へい、か……」

莓に良く似た果実が地面に転がる。

俯いたフィオレの顔は想良にしか見えない。白い顔は益々青白くなり、唇がガタガタと震えている。

(……コイツ、敵だ)

プロクスの様に驚異的な恐怖は感じないので、その場で唸り続ける。

「これがお前の元に現れた猫か……フィオレ、そんな物に頼るほ

ど私が嫌か？」

答えはない。フィオ レは何も答えない。

一歩ずつ男が近寄るので、想良は激しく鳴く。全身の毛が逆立つ。

(頼むからメイドさん、気付いて！)

大きな声で鳴けばこんなに静かな場所だ、遠くても聞こえるかもしれない。まだかすかに想良の耳にはエクラがフィオ レのことを呼ぶ声が聞こえていた。

どれくらいの距離かは判断しかねるが、聞こえていた。

「煩い猫だ」

男は腰にかけていた剣を抜き、想良に刃を向ける。

「や、やめ……て……！」

上にフィオ レが覆いかぶさる。震えはまだ止まらない。

「それがそんなに、大事か？」

頷き、今度は答える。

「ならば、宮へ帰れ」

「もう、……放つ、ておいて……ください」

毛が濡れた。フィオ レは泣いている。男が泣かしたのだ。

女を泣かせる男は赦せない。

子供を泣かせる女は赦せない。

男はフィオレを無理やり立たせようと手を掴んだので、思いっきり歯を立てる。

「っ！！！」

『げえ、マズっ』

腕の中から抜け出して、ペッペと血を吐きだす。

体に痛みが走った数秒後に、悲鳴が聞こえた。

(ま、たかよ……)

男の持っていた剣が赤く濡れている。想良の血だった。猫の白い体の真ん中には不自然な赤が溢れている。

今はまだ死ねない。

凜の時と違ってフィオ レは安全じゃない。

死にたくない。

痛みにある体で立ちあがろうとするが上手くいかない。

『えく、ら、さんっ』

メイドさんでもいい、誰でもいいから、フィオ レさんを誰か守って……。

その願い、聞き届けましょう

懐かしい声が、涼やかな声がそう言った。

38・裏庭（後書き）

想良に追悼。次回はエクラ視点か閑話。

39・救されざる失態（side：エクラ）

昨日の夜、スキアーがフィオレの部屋に行きにくいだらうから身支度は明日の昼までは自分が変わろうと申し出てくれた。

少しの間であったとしても、エクラにとってそれはありがたい申し出だった。

どんな風にして、どんな顔をしてフィオレに接するべきか接しななければならぬかエクラわからなくなっていた。

「だが、貴女には貴女の仕事があるのでは？」

「気にしないでいいです」

笑う女の全体の顔は見えない。口だけが目には映る。

「ありがとう、明日の昼まで頼む……」

今思えば、彼女は知っていたに違いない。グローム王がここに来ると。でなければ、こんな風にフォーレが逃げ出せるはずも、何もなかった。

猫の鳴き声にエクラは足を走らせる。

さきほどまで自分が居た場所から声は聞こえてくる。走って、走って彼女は知る。また、自分は間に合わなかったのだと。

白い猫は横たわり、フィオレは泣きながら悲鳴をずっと上げていく。自分の主である男だけが冷やかな目で全てを見ていた。

(いつもなぜ、守れない!?)

心音の煩さと頭痛で倒れそうだった。

「ソラさん！ ソラさん！」

フィオレのピンク色のドレスは赤を吸ってどんどん汚れていく。

「フィオレ様、離れてください。お召し物が汚れます」

「なんて、酷いことを……み、んな私のことなど、放っておいてくれればいいのに……！」

想良は既に手遅れだ。息をしてない。

名前を呼んでももう、聞こえていない。

「立て、フィオレ」

「嫌です、いや……！」

あああああああつ！！」

空間がえぐられたように、オーディオの手が消える。

白い髪、青い瞳。

先ほど死んだ猫と同じ配色をした青年がいつの間にかそこに居た。

「アーグア」

誰が口にしたのか、エクラにはわからない。

オーディオは地に伏し、いつの間にか、シャルロットとスキアーが目の前に立っていた。

「屑の味方ですか？ どうでもいいですよ、もうこの世界を生かすことはしませんので」

全てが遠く、冷ややかだった。

「すでに、生と死は等しくなりました。何もかももう、手遅れです」

39・救われざる失態 (side・エクラ) (後書き)

次、閑話。こんなことをしておいて、閑話!!

閑話・優しくない嘘 (side・小坂)

今にも振り上がりそうな広人の手をおれは抑える。

「やめなつて」

「わかつてる……」

獣が唸るような低い同意。

理性が一瞬でも怒りに負ければ、広人は子供に対し容赦なく拳を振るだろう。

(おれだつて同じだ)

「覚えてるよ」と、想良は悪態を付きながら出て行った。帰って来ると思ったから自分たちは「いつてらっしゃい」と見送ったのに。

想良はいい加減、もしくは出鱈目を人型にしたような人間だった。基本的に深く物事を考えてないのだ。

あるとすれば、その場の勢いと自己が如何に楽しく生きれるかそれだけだ。

初めて出会った時も、そうだった。

おれは知らない奴らに囲まれていた。なんで囲まれていたのか理由もわからない。

たぶん、見た目弱そうなのでカモにでもする気だったのだろう。

（殺したい……）

殺人衝動が俺にはある。

人だけではない。全てが気に食わないから気に食わないものをすべて排除したいのだ。理由はない。

きっと双子の弟の彼方かなたは人の良い奴なのであいつにおれの中の善良という感情が流れていって、おれには邪悪な感情だけが腹の中に居るうちに振り分けられてしまったのだろう。

いつか誰かを殺すためにおれは道場に通い、ちやくちやくと力を付けていった。

（こいつらを殺すのもいいな）

弱いと人のことを見下すこいつらを。

舌なめずりをし、拳を握ったところで場にそぐわぬ明るい声が聞こえた。

「えーっと、確か同じクラスの……なんか、下の名前も苗字っぽい
小坂くんじゃないか！ いいところで会った。俺にちよっと付き合ってくれない？」

水縁想良は二つ上の不良、前島広人と友好関係にあるということ
で他人から敬遠されていた。

同時に、青い目をした美しい少年は現実から隔離された場所にある
別世界にいるような印象を人に与え羨まれても居た。

（ちっ、邪魔が……。大体、最初の“こ”しかあつてない……）

「おい、てめえ、俺達が見えねつてのかああああああん？」

「誰、あんた達？ 俺、あんた達には用ないから、さよならー」

不良からおれを想良は引き離す。

一人が不満そうに口を開いたがもう一人が諫めた。

「やめとけつて、アイツ前島の……」

あとは聞こえなかった。

おれは引っ張られて連れられていたから。

振り払えるほど細い手だったのに、なぜかおれは振りほどけなかつた。

「どこ行くんだよ」

引っ張られながらため息交じりに言う。

想良は聞かれると思ってなかったのかきよとんとしてから言った。

「あー、うちん家、うちん家！ 今日ヒロが居ないから暇なんだよーね。小坂くん、一緒にゲームをしよう。内緒で強くなって、ヒロと一緒にボコボコにしようじゃないか！」

勝手だと思った。なのに、殴りたいとは思わない。

はじめて感じる、不思議な感覚だった。

想良と言う人間は、ふとした拍子に、遠くなる。

人と一定の距離を保つことで、自分のことをいい加減な態度で守っている。嘘を要所所で吐くのもその一環なのだろう。

彼の嘘は自分にも人にも甘くない。

寂しい嘘で塗り固められた綺麗な少年が想良だった。

きつと誰も本当の想良には触れられないし、触れてはいけないのだ。

(でも、どこかでいつか おれ達、おれは触れられたらいいなと思
つてた)

友人にされたけれど、友達というにはどこか遠い距離。

あの時、腕をとられた時、選ばれた気がして嬉しかったのだと思う。
振り払わなかったのではない、払えば逃げてしまうことがわかって
いたから振り払えなかった。

自分勝手な想良は酷く優しく、酷く冷たい。

目の前で横たわる死体に、綺麗さは微塵もない。
あの自分が触れたかった想良はここにも、どこにももつけないのだ。

(「おかえり」)

それを口に出して、言うことはもう二度とない。

もう一度、優しくない嘘が聞けるならおれは目の前の子どもも、隣の友人も親も兄弟も、全部殺さないと誓えるのに……。

胸の内の獣が「全部殺せ」と唸ってる。

閑話・優しくない嘘 (side・小坂) (後書き)

次回、本編！

閑話：海と白い傘

白い傘がくるくると回るのを見つけるなり俺は走って、大好きなその人に飛びつく。

彼女は世界で一番好きな人。

「グランマー！」

「あらあら、想良ちゃん、どうしたの？」

浜辺には不似合いな藤色の着物を着たその人だけを、朗らかに笑うその人だけを愛してた。

十一年前、俺にとっては彼女以外の全てが敵だった。子供を理由に男に縋る母親も、偽善者ぶった祖父も皆大嫌いだった。

男はいきなり現れて置いて、今更自分が父親だと言い。

母親はお腹の中に子供がいる、家族で暮らそうと笑う。

祖父は家族ができるのは良いことだとしきりに勧める。

ねえ、本当にその中に俺の幸せはあるの？

誰か俺のこと少しでも考えてくれた？

(幸せごっこなら余所でやれよ、うつつうしい)

彼女だけが母の頬を「恥知らず」だと叩き、俺の手を取ってくれた。

子供が何も思わないとでも思ってる？

子供は人間のできそこないじゃない。

知らないことが多くても、伝えることが苦手でも立派な人間なんだ。

「隣の家のマーサさんがおやつの時間って教えてくれた。だから、
迎えに来たよ！」

荷物を纏めて俺たちがやって来たのは、海の綺麗なこの町。

グランマは海の見える町で生まれたらしい。できることなら俺をそ
こへ連れて行きたいと言ってくれたけれど、日本に連れていくには

権利がないから代わりにこの町を選んだと悲しげに笑った。

ねえ、ずっとこうして居られたら、俺は幸せだよ。
寂しいことなんてないよ。

ずっと、ずっとこうしていたい。願った。 神様、これはそんな
にも強欲な願いでしたか？

鐘の音が鳴り響く。
ここには彼女の愛した青がない。海がない。鈍色の空と雨の嫌な臭
いしかない。

そんな場所に、土の中に棺は埋まっていく。

(good-bye)

別れのキスを投げる。

葬式の間中母はずっと泣いていて、男に縋ってた。
祖父は傍に居たけど何もしゃべらなかつた。

生まれたばかりの子供の鳴き声だけが煩かつた。

「Come on Sora!」

「……………」

子供は大人の道具なんかじゃないのにもう、誰もわかつてくれない。
もう少し、あの子供が大きくなったら俺は家族で日本に暮らすのだ
と言われた。

何それ、ばっかみたい。

帰り道、祖父は三人を先に家に帰し、俺を公園へと連れて行った。

道の途中でジェリービーンズを買ってくれた。

もう、この世界には誰も俺を愛してくれる人なんて居ないのに愛してどうするの？

ねえ、なんで悲しそうな顔をするの？

ああ、そうだね。いいよ、あんた達が望む世界で生きるよ、そしてら、満足？

あんた達、俺のことなんて、本当にどうでもいいんだね。

最近母親がよく、泣き叫ぶ。

ちゃんと学校にも行って、くだらない日本の行事にも付き合ってるのに、皆俺の何が不満なのさ？

「なんで日本語喋んねえの？」「」

日本語はグランマと俺の特別魔法の言葉。

だから、日本人と最初話さなかった。隣の家のこととデカイガキはしつこく俺に絡んでくる。

ねえ、なんで。なんで。なんで？

なんで日本語を話さないのかって？ 勿体ないからだよ、俺はグランマだけ居れば良かったんだよ！

どうせ、話してもお前らは聞いてくれないんだろ、知ってるんだよ！
いろんなことをまくし立てた。

「そうか、お前も大変なんだな」

そう言われてむっとした。

何もわからないくせに、返事するな！　そう、怒鳴ろうとしてやめる。

「……わからないのに、返事すんなし、うぜ」

そうか、ああ、日本人らしく生きることも含めて家族なのか。ああ、
わかったよ。

俺を捨てれば皆、満足なわけね。わかったよ。満足なんだろ！？

閑話：海と白い傘（後書き）

閑話が先に来た。次回こそ、本編。

40・青を帯びた青年

青い目をした青年は言葉とは裏腹に優しげだった。顔に浮かぶのは慈愛に満ちた穏やかな笑み、目の奥を見つめたとしても負の感情は見つけられない。

「ぐげえっ!!」

それに対して、今まで聞いたこともないような敵意の籠ったシャルロットの声にエクラムフィオレも驚きを隠せなかった。

「どうなっているの？ ソラさんは？」

「フィオレ様、オーディオ様を連れてこちらへ来てください。その男はアーグアの傍に居ては危険です」

こちらもちちらで敵意を隠そうともしない。

「一時見ない間に、貴女達醜くなりましたね。片方は人に身を落とす、もう片方は言葉を忘れたただ獣となったわけですか……とても残念です」

「お二人とも早く！」

スキアーの言葉は二人とも聞こえているが動けずにいた。フィオレは現状がわからず、オーディオは消えた腕の痛みにより。

「別に人質にするつもりはないのですけれど」

浅く笑ってからアーグアは、フィオレ、次にオーディオを立たせる。

「言うとおりあちらへ行くといいですよ」と、言う彼の人をその間オーディオは信じられないものを見るような目で見ていた。まるで、労わるような振る舞いだっただ。自分の腕を消した人物とは到底思えなかった。

「さて、これで盾にできるものはありませんが……次は、何をします？ 貴女達がリュズギアルやラントと繋がってるのは知っていますし、不意打ちなど考えずに呼んでいいですよ」

「なぜ、それを！！」

「手遅れだって言ったじゃないですか 馬鹿、ですか？」

誰もが核心した、不意打ちなどしても無意味なのだ。

穏やかなのに、怖い。

優しげなのに、冷たい。

「誰を呼んでもいいんですよ？」

誰を呼んでも勝つなど無理だ。

「それでも滅ぼすというなら、もう一度眠らせます！」

真っすぐな、スキアーの眼差しを青年は笑う。慈しむように。

ジジジジジジジジジ。

ジジジジジジジジ。

電話が鳴ってる。

(電話とらないと……)

俺は歩いて、黒い受話器を持ち上げる。

「はい？」

「わーん、やっと出てくれたああああっ!! もう、ずっと連絡したのに、なにしてたんですかああああっ!!」

何コイツ、うざい。

「……あんだ誰? うざ」

「誰ってヤダな、七兆とんで五千三番目の管理者ですよ! もー、十五億九千九百三十二番目の世界の管理者さんってば冗談が相変わらずきついんだからあっ!」

奇声に近い声に、俺は首をかしげる。相手の声は聞き覚えがないし、言っていることも意味がわからない。

「それで、今回電話したことなんですけどー」

「ねえ、誰だつて聞いているんだけど」

「……え、十五億九千九百三十二番目の世界の管理者さんじゃないの？」

「誰それ」

電話の向こうの誰かも俺も沈黙。

「……君、も、もも、もしかして、ミスヘリソラ？ なわけないよねー」

「だつたら何？」

相手は「うー」とか、「あー」とか無駄に唸る。

「質問なんだけど、なんで君が十五億九千九百三十二番目の世界の管理者さんの世界に居るの？」

「t u t …… I t d o e s n ' t m a k e a n y s e n s
「e

意味がわかんねえよ。

誰だつて聞いてんのに、こいつばっかじゃねーの。

「……大変言いにくいことなんだけどお、こつちの世界の共通用語で喋られると今そつちの世界言語に合わせてあるから翻訳ができたかったりしちゃったり？」

「何を言いたいのか、まず文章をまとめろ。意味がわかんねえんだ
よ」

「出直してこい」と、受話器を下に置く。

カシャン。

その手を俺は凝視する。
まぎれもなくそれは、ふさふさな白い毛も柔らかかな肉球もない人間の
手だった。

40・青を帯びた青年（後書き）

あれ、死んだはずの想良が。さて、一体どうゆうことでしょうか！

はい、次章！！ あ、It doesn't make any

senseは「全然意味がわからない」です。そして、なんか勇者くにつられてこっちのお気に入りも増えている件についてを誰か説明してくれ！！！！

41・白い空間と謎の電話相手

手のひらを裏返す、尻尾のない尻を見る。黒い髪を掴む、足で歩く。

「人間だ、人間の体だ!!」

俺は手で顔を覆う。

「俺、人間だ……人間なんだ……」

猫の姿は苦痛以外のなにものでもなかった。

あの姿はどんなに己を殺そうとも傷つくばかりで、辛かった。

あれは、夢だったのだ。

ジジジジジジジジジ。

ジジジジジジジジジ。

再び、鳴り響く電話。取らずにそれを見つめ、それから周囲を見渡す。

黒電話以外、何もない。なかった。

電話からどこまでも伸びる電話線が白い空間に立体感があるというのを告げる。

「どこだよ、ここ」

映画で実験場にでもされていそうな部屋にも思えるが、終わりの見えない電話線からそうではないと確信する。
恐怖心から、いろんな方向にひたすら走る。走る。走る。

辿りつけるのは、黒電話があるその場所だけだった。

ジジジジジジジジジ。

ジジジジジジジジジ。

観念して、受話器を持ち上げる。

「はい」

「もしもしー、ミズヘリソラ？ おっそいよう」

「フルネームで呼ぶな、うざい」

受話器を少し離す。

ぶーぶーと受話器の先の相手は前回と同じように奇声を上げる。

「じゃあ、ソラって呼ぶけどお、君に質問です。十五億九千九百三十二番目の世界の管理者さんの世界になんで居るの？」

「先にこっちの質問に答えろ、お前は誰だ。なんで、俺のこと知ってんだよ」

「だからあ、七兆とんで五千三番目の管理者だつてば。君のことを知っている理由は、君と言う存在の情報を共有してるからつてので、ご満足いただけるう？」

理解できない。

「さっぱり、わからない」

「理解力ないなー、もうっ！ らちが明かないから、十五億九千九百三十二番目の管理者さんにかわってよっ！」

「ここには俺以外いない」

「いーなーいー！？ わぁー、面白くないジョーク。そんなの、ありえないから」

見渡す限り、白い空間が続くだけのこの場所にはこのイカレた電話相手の望むような人物はいない。

「いないものは、いない」

「えー、また他の世界の手伝いでもしてるのかなあ。じゃあ、君でいいや、もう、めんどくさいから。伝言を伝えてよ」

人が返事もしないうちに、相手は喋り出す。

「エラーは無事に回避成功。サイトウユカ、キツキトオル、ミズヘリソラの死亡を確認、タツセミキヤは無事生存。はい、以上でよろしく」

サイトウユカ。

キツキトオル。

ミズヘリソラ

死亡？

生存は、タツセミキヤだけ？

他の三人には聞き覚えがないが、水縁想良なんていう珍しい名前の人物がいるとは思えない。

だがしかし、現にいま自分はここでこうしている。

死んでなんかない。

「待て、なんで、俺が死亡なんだよ!!!」

「え、ミズヘリソラは交通事故だけど？」

「あれは、夢だろ、だって、俺はここに……」

相手は重々しく溜息を吐く。呆れているようにも聞こえた。

「君つてば本当になんでそこにい、居るのお？ 思考ごと情報を持って帰ったんだとしても、わけわかんない。十五億九千九百三十二番目の管理者さんつてば本当に何してるんだらおー」

「そんな、死んでなんて、俺は」

「あのさー」と、相手は愚痴混じりに続ける。

「現実逃避やめてくれなあい？ 君は、死んだの。そこになんて居るかは知らないけどお、ね」

（そんな、嘘だっ!!!）

人間の時の体がここにある。

服だって、あの時来ていたものだが血の跡どころか、一雨に濡れた気配すらない。

「まー、死んでも悲しむことないよ。どーせ、零の世界のための確定分岐だもの」

「ぜろのせかい？」

「そつそ、ぼくたちみたいな管理者は零を一にするためにいるけど。君はただの情報体。つまりデータなわけ。死ぬも何も確定してたんだから悲しむなんて必要ないでしょ？」

受話器の声が一気に遠のいた。

水縁想良はデータ？

俺はじゃあ、なんだ？

「おーい」

やたらと明るい声が、死刑宣告に聞こえた。

41・白い空間と謎の電話相手（後書き）

これから、電波臭漂う話になっていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5125v/>

死んだら猫った！

2011年9月29日00時53分発行